

わいふ

142

特集
日本のおばあさん



Nida

主婦のための投稿誌——わいふ

書きたいひと
考えたいひと
知りたいひと
怒りたいひと
「わいふ」は
あなたの雑誌です
あなたの中にあるものを
声にしてみませんか？
あなたは 発見するでしょう
同じことを
考えていたひとが
あそこにも ここにも
いたことを
そして
みんなで考えるとき
あなたは もう
一人ぼっちではない
ということ

投稿規定
投稿は原則としてすべて掲載します。
予約購読者はどなたでも投稿できます。

- (一) 随筆、随想、テーマ自由、二千字まで
- (二) 持込み原稿、形式、内容、長さ制限なし、
特集テーマ原稿、評論、文芸作品及び
問題提起など。ただし、掲載は編集
部で協議の上、決定いたします。
- (三) おしゃべりコーナー おたより、
家事のヒント、「わいふ」への
注文など、葉書一枚から千字まで。



わいふ・142号・目次

- 2 内助の夫 ⑤ — ここにもいたすばらしい夫族 — 杉山正一さん
- 4 投稿随筆 — たていとよこいと — 中田英子・徳光利子・中西淳子・吉羽芳子
岩田婉子
- 8 わいふティーチ・イン — 発言と論争のページ — 田中喜美子・中原律子・北村七重

特集 日本のおばあさん

- 14 いやでも老人になる — 現代の親孝行とは？ — 森 幹郎
- 20 特集投稿 後藤里子・蜂谷まさよ・西本慶子・石原宗里・田原多美子
中野桂子・北本 柳子・三矢久子
- 29 あなたは“恍惚の人”にならない — 新福尚武教授に聞く — 林 慶子
- 32 老いるということ — 伴野正枝
- 34 老人と性 — あなた自身の歪みがここに反映している — 田中喜美子
- 40 第一回わいふ合評会
- 42 ベランダ園芸を始める人のために — 和田直久
- 44 主婦と年金
- 45 未来小説 未知の領域 — 和田好子
- 50 おしゃべり 小椋昌子・足達啓子・木村澄子・S.I・小林やすえ
藤井裕子・高橋裕見子

表紙・新居田郁夫

カット・岡村紀子

ここにもいた すばらしい夫族

杉山正一さん



一粒ダネのみどりさんが「家庭とは何ぞや」という議論を吹っかけてきたとき、この父親は一言の下に云った。

「それは愛だよ」

男女の権利とか、義務とかに基づく家庭論を、大学で仕入れてきていたみどりさんは、ハッとしたように口をつぐんだという。

しかし杉山夫妻を前にするとき、相互の尊敬にもとづく人間として対等な愛は、安易な生活からは生まれぬこともまた、人は思い知るのである。

どんなにさばけた校長先生でも「校長くさ」の全くない人は珍しいが、杉山先生は、その珍しい一人といえる。

終戦後、郷里の小学校で教鞭をとったところ、すでに型やぶりの若さを発揮していた。

「何しろ軍服着て、サーベル下けて、馬にまたがって学校にくるんですから。遅刻はしょっちゅう。校長さんもまた呑気なもので、『まだ、杉山先生、こねえな。朝礼もう少し待ってるべ』って児童を待たせとくんですからね」と妻の愛子さんは笑う。

早大の演劇班がくれば夢中になり、いっしょになって舞台づくり。校長が、「先生、困るよ、子どもたち待ってるよ!」と呼びにくる。

そんな先生だったが、一方では教育にひたむきな若い杉山先生は、職員わずか十名の村の小学校で、愛されていた。何の拘束も、抑制もなく、情熱の赴くままに教育に取りくむことのできた当時を、先生はなつかしむ。

愛子さんは当時の同僚である。

何をかくそう、二人とも文学青年で、競争で小説を書いていた。「書きたい、書きたいの一心でね。若かったんですなア」と先生は云う。

そんなこんなで、教職にいや気がさし、昭和二十三年、二年半教えた小学校をやめ、たった五円の金をふところに郷里をあとして上京、友たちの家にころがりこんだ。

長男だったから勘当同様である。

それから三年、子ども新聞や習字の教科書など、出版の仕事しながら、一匹狼で生きてきた。愛子さんの小説を出版したのもこの時期だ。

「東京中の本屋のありかを知ってましたよ。」

自分でリュックにつめて本を卸して歩いたら「過労でガリガリにやせてしまい、ときどき訪れてくれる愛子先生がさし入れてくれた弁当を「本当にうまかったなア……」と先生は思いおこす。三年間、愛子さんは先生の支えだった。

愛子さんの方は教職一筋。この四月、区立の小学校を停年退職する前は、校長だったから、「おしどり校長」などと騒がれたものだ。

十七才で親に秘密で代用教員の試験を受け、その後難関の検定試験をパスして正式に教師になったときは、能力と努力のほどはどうかかわれる。

「今でも授業をしたら、私はおそらく家内に敵いませんなア。郷里にいたところから、この人の教える才能は抜群でした」と正一さん。

妻の才能と、努力のすさまじさを尊敬していたから、仕事をやめさせたいなどと思ったことは、一度もない。夫婦ゲンカの時さえ、口走らなかつたのである。

何事にも全力投球する愛子さんは、授業が終って家へ帰るとぐったりする。家事が一通り終わると九時、十時。

こどもが生まれてからは、たいへんだった。

若い娘さんや年寄りと、次々に手伝いを探してこどもを預けたものの、手伝いの人は、子どもが眠っているほうが楽だから、日中、なるべく長くねかせておく。

「夜泣きのくせ、眠らないくせがつきましてね……疲れた体で、仕方なくオンプして外へ出たり……」

そういう妻の姿を見れば、自然に家事を手伝うようになる。第一何もしないでいては、ご飯もたべられない。だから杉山先生の家事手伝いは、平等だ、同権だなどという理念の問題ではなくて、子どもを育てていく過程で自然に身についたものである。

「もちろん、自分も楽をしたい、家内にも楽をさせたいという気持がなかったわけではありません。心の葛藤はありました」

でも妻の才能を尊重したい、仕事を続けさせたいと思えば、何もかも妻におっつけてはいられない。拭掃除、おむつかえ、買物。何でもやるようになってしまった。

「本当にありがたかったですね。家事を肩代りしてくれる人があることは……それに私が試験を受けるときなどは、絶対に足を引張らずに積極的に援助してくれましたし」と愛子さんはしみじみ云う。

そのくせ妻は、夫の家事手伝いに関しては、カンコウ令をしいていた。家事一切をとりしき

れないのは、女の「恥」だったからなのである。

「女性が仕事をしていく上で、何といっても最大のハンデは、子どもですね。」

この人も、江戸川小学校で作文教育にうちこみ、業績もあがり、はたからも認められて、これから、というとき、出産、育児。

女の才能は男に劣りません。それが育児で中断される。つくづく可哀そうだ、と思いました。妻は仕事の上で、もっともよきライバルであり、議論の相手でもあった、という正一先生の言葉のひびきは、痛切である。

子どもの大きくなったいまは、若いときのように、夢中で議論することもなくなつたかわり、互いに自分の経験を生かして助言し合い、いたり合う夫婦になった。

小さいとき、両親の不在が辛かったのか、「ママのバカ。なぜ帰ってこない」と落書きしたこともあるお嬢さんも、いま、一人前の教師。

こどもが可哀そうだから、自分は職業婦人にはならない、と云っていたのに、最近は教育に情熱を燃やし始めて、どうなることやら、と両親は微笑むのである。

(田中)



投稿随筆

たていと
よいと

投稿随筆

郊外の暮らしの

中から



横浜市

中田英子

田園都市線の沿線に引越してきて丸二年半になる。この辺は田舎であるが、田舎といっても近頃は畑や林も少くなり、それだけ増えた住宅も一軒が五十坪位の土地で、中層のマンションも目につく。駅の近くには高層のマンションもあって都会的雰囲気である。田舎と云うには人工的に過ぎ、都会と云うには泥臭い。しかし車を運転する身にとっては、駅前のロータリ

ーや、並木で区切られた歩道のある広い道は有難い。前の田園調布のマンションから比べれば、家も広くなり、何より庭があって緑に覆われている。覆われているというのは少しオーバーだ。本当は、居間兼食堂の前の四角いポーチの上につくった藤棚の藤がバカに勢いよく伸びて、部屋の中に居ると、緑に覆われているような気がするのである。

この藤棚は、引越した年の夏、一番下の、今年三才になる男の子が二階から落ちて大怪我をした時、これから又落ちても棚があれば、と思って造らせたものである。藤は棚を造ってくれた植木屋のサービスで、植える時に、花の咲く方がいいですか、それともつるの伸びる方がいいですか、ときかれた。

私は一刻も早く緑に覆われたと思ったから、即座につるの伸びる方と答えたのだが、それが間違いであった。私は、藤と云えば、当然紫か白の花が咲くものと思いこんでいた。だから、つるの伸びる方というのは、今年は花は咲かないが、来年あたりからは咲く、という意味にとったのだ。そうしたら藤には花が咲かないというのがあるそうで、我が家はどうやらそれらしい。その代り、つるや葉の茂る勢いはめざましい。さし木をすれば花をつけるようになるそうだが、面倒で未だ実行していない。それからもう一つ、去年の秋には十月頃になってもなかなか葉が枯れ落ちなかった。秋になっても藤の葉は青々としているのである。九月末ともなれば、もう秋の日ざしが心地よく感じられるのに、ポーチはまだ緑の屋根をかむり、部屋はさびさびと日蔭になっているのには閉口した。去年は残暑が長かったからであろうか。今年は去年よりはるかに沢山つるも伸び、葉も茂ってしまったので、これはえらいことになるぞ、と思ってい

る。藤棚は西日が差し込むあたりに向いているようである。

この辺は東急の建売住宅が多く、我家もその一つである。土地は四十五坪から六十五坪位、それに二十坪から三十坪位の家が建っている。チマチマとして建っているが、総合的に計画的に建てられているせい、か、家並は揃っていきいである。これは大手の建売の良いところであろう。分譲の土地だと、この頃ではやはりせいぜい五十坪位の中に、スペイン風とか、北欧風とかの家が建ち並んで、街としては收拾がつかなくなるのではないか。でも、やはり五十坪位の土地付家ではブライバシーは守り難い。ブロック塀を造るのは厭だし、目隠しする程木を植えれば、通風も悪くなり、木もののびと育たない。結局私達は、子供も大勢だし、解放的に、人の目を気にしないで暮す以外にない。前の家の二階の窓から我が居間はまる見えであるが、気にするわけにはいかないのである。

我が家の居間の丁度真前あたりに前の家の風呂場がある。その家の

主は、六十才位のガラガラ声の男で、大きな音をたててうがいをしたり、風呂の中でザーザーと威勢よく湯をかぶるのが大好きらしい。それで我々は、ときどき銭湯の隣りに住んでいるような気分になったり、動物園のいるかのおりの前に立っているような気分になったりするのである。何時のことであつたか、居間で新聞を読んでいると、時でもない季節にジージーとセミの鳴き声がする。ハデ、今頃セミとは少し早過ぎる、と思つて音のする方をよく窺うと、どうやらそれは、前の家の電気カミソリの音らしかった。

先週は、我家の庭つづきの右と左の家が何処かに出掛けていて留守であつた。そんなとき、私は何とはなしにのんびりする。O家ともG家とも仲が悪いわけではなく普段からお互いに干渉もせず、うまく暮しているのだが、土地が五六十坪だとこんなものなのだろうか。裏の家とは極く親しく付き合っているが、こんな風には感じない。してみると付き合い方のせいなのだろうか。田園調布の大きな

屋敷や、下町の軒をあわせた開放的な住いとも又違った味なのであらう。

ムクゲの花によせて



柏市
徳光利子

一昨年引越した、ここ柏市の一隅の狭い庭に、今年も白と紫のムクゲの花が咲いた。真夏に咲く数少ない花の中で、私を限りない郷愁にひたらせてくれる好ましい花だ。

大田区蒲田で子供時代を過ごしたわが家の庭に、大きなムクゲの木があつた。もともと、母は私に「ハチスの花」と教えてくれたのだが……夏休みになるころから咲き始める美しい花。たしか白と赤エンジの絞りだった。庭にある大きな井戸にスイカを冷やし、昼寝から覚めてパクついた味のおいしかったこと。冷たいスイカをは

おぼりながら見たムクゲの花。私は小学六年生。母も随分と若かつた。緑が豊富で空気がおいしく、家の前と横には小川が流れていた。け。まるで夢のように懐かしい思い出のひとつである。

あれから四十年。母と私の織りなす数奇な人生模様があつた。反物にたとえれば、又とない美しい柄ゆきだったに違いない。花好きな母は発電所の社宅に越して来てからも、四季折々の花を咲かせ、ご近所の皆さんに分けてあげて、心から満足していた。そして、夏ともなれば自然環境に恵まれたあの蒲田のムクゲの花を懐かしみ、あれこれ語り合つたものだった。

昭和三十五年、丈夫だった母が突然倒れ、五、六分の中に息を引き取つた。婚家先からかけつけた私は、大往生の母の最後の言葉を聞くことが出来なかつたのである。母、七十八歳。しかも八月十五日。日本にとって忘れることのできない終戦記念日である。父の定年後引越した狭い庭にムクゲの花はなかつたけれど、どこかの庭で暑さに負けず力強く咲いているところ

であつた。

昭和四十八年七月に、母の十三回忌の法事があつた。夏には珍らしくしのぎやすい日であつた。亡くなる時もたれの世話にもならず、ポックリと逝つてしまつた母らしく、子供たちや親戚の集いやすいように涼しくしてくれたのだと、一同回顧談に花を咲かせた。裸一貫で上京した父と母。無学だった自分を悲しみ、せめて子供たちには学問をと一生懸命働いてくれた父母。兄のつくれた立派なお墓に入ってしまった母だけれど、同じ女性として、母の年齢に近づけば近づくほど懐かしさがこみ上げてくる。

親ゆずりの草木好きな私の日課は、朝の水やりに始まる。ねむたい目をパッチリ覚ましてくれる輝くばかりの早朝の緑。ムクゲの花は明日はいくつ咲くと心待ちする楽しさもある。そして、いつの日か母のお墓の傍らにムクゲを植えて、亡き母と懐かしい少女時代の語らいをしたいと感傷にふけるところである。

盆踊り



名古屋市

中西 淳子

日本の夏の風物詩ともいえる盆踊りが、今年もまた行われました。子供にせがまれてとはいえ、私自身も太鼓の音につられて、決って毎年出かけていましたが、輪の中に入って踊ったのは、今年がはじめてです。

いつも「踊ってみたいな」「踊ってみようかしら」と思うだけで、なかなか自分から進んで輪の中に入る事ができませんでした。

「踊るアホに見るアホ、同じアホなら踊らにゃそんそん」とはよく言ったもので、踊ってはじめてその意を実感しました。

輪の中に入って皆と一緒に踊るという、ただそれだけのことですが、「見ている側」から「やる側」へ移ったということ、そして実際

にやってみて楽しかったということとは、私にとって一つの事件であり、心境の変化の現れと申せましょう。

「人は何の為に生きているのか」という問いかけに、いつも覚束ない、不安な気持ちでしたが、「何かをしなくては」という止むに止まれぬ気持ちになって、「人生とは何かを為すことなり」、「人生とは、自分で何かを作り出すことなり」と思い出してからは、何であれ、何かを積極的にやれば楽しいということをし、身をもって知るようになりました。

それまで私の心の中に浮かんで消え、消えては浮かんでいた無常感、虚無感が、今では現実をより積極的に生きようとする、原動力となっているようです。

私は、三十を過ぎてようやく、人生の何たるかを体得できたような気がしております。

ところで、何かに酔い痴れて我を忘れるということは、本当に気持ちの良いものですが、踊りなど、その点手取早く自己陶醉のできるものではないかと思えます。

小さい頃に日舞を少しやっただけで、あとは学校で習った歌に勝手に振り付けをして踊ったり（それはそれで結構楽しく、得意でした）中学・高校でのフォーク・ダンス（次々に相手が変わり、ついに意中の人がそばに來た時の胸のときめき、なつかしい青春の思い出です）大学に入ってからは、ダンス・パーティーでの社交ダンス（はじめの頃は素敵な彼との出会いを期待していたのですが、その内彼より踊りの方が良くなって、踊りの上手な人に出会えたらと思うようになりました）家庭に入ってから、本当に踊る機会もなくなりましたが、うっとおしい雨の日など、ステレオのボリュームをいっばいにして踊り惚けて、気分転換をはかったりしています。

その内、子供の手が離れたら、今までの自己流の踊りを卒業して本格的に踊りを習いたいものだと思います。

良寛和尚の歌に「風は清し月はさやけしいぎ共に 踊り明かさむ老いの名残りに」というのがありますが、私もおいおいこうした心

境になれたらと思っております。何であれ、真剣に取組んでみるのが若きなら、すべてを超越して軽みの境地に至るのが、美しい老いの姿ではないでしょうか。夏の夜の盆踊りをきっかけに、私はこんな感慨にふけりました。

胸がキュッと

なること



練馬区

吉羽 芳子

悲しくてもくやくしくても私はニクラシイほど泣かない人です。でもこんな時には……。

中西さんのお子さんのことは、「ダイチャンイタ!!」だとか、西田さんの「走っていったお兄さんの気持ち」だとか、そんなきれいなものであったり、動物が主役になった時です。

□ 三年ほど前、横浜の坂道で子牛ほど大きいシェパードを連れてた七〇才くらいのお年寄りですれ

ちがいました。いきなり犬が私にとびかかりました。おじいさんはひきずられながらやっと犬をとりおさえました。私に大丈夫ですか？と尋ねながら、おじいさんは、「おまえはどうして悪い子なの」とぞうりでパンパンと犬をたたきました。私は物かげにかくれながらケガを忘れて思わず叫んでいました。「もうたたかないで、私は大丈夫」愛犬をたたいてはおじいさん、言い分も聞いてもらえずふたれている犬、私の方があやまりたいようなふしきな気持ちで胸がいっぱいだったのです。

□ 春の風がふんわり吹いていました。花の香りが流れる路地を、いい気分で歩いていたらソナチネが聞こえて来ます。『そうそ、あの曲私は小学三年生。おばあちゃんが生きていて、自転車乗りを覚えたとの、あの頃』なーんて。この香りややさしさ、この瞬間と同じ気持ちを私いつだかも感じたな……おたやかで静か。

□ 半年も土の中、やっと芽を出して霜や雪に耐え、ツボミをつけ色づいてようやく咲いたその日、

いたずらっ子に折られてしまった花。花に対して何と言って詫言いはいいのか。花の痛みや悲しみ、あの子に話せばわかってくれるかな。わざと踏んづけたりしなくなるかな。

□ 八才半の母ネコと六才半の娘ネコがいました。娘ネコはがっかりとたくましく犬はども大柄でした。母ネコはそうじ機を何よりも恐れていました。ガーガーうる化物だからです。娘ネコは平気で、私がそうじをする傍にゆったりとねそべっています。すると母ネコはそうじ機に必死で体当たりしてくるのです。命がけて娘を助けようとするのでしょうか。小柄な母ネコの勇氣に私は何度か途中でそうじをやめました。でも、娘ネコは今はいません。

娘がいなくなつて十日ばかり母ネコは何も食べず、やせおとろえてわが子をさがして歩きました。私は、母ネコの嘆きを救ってやることに夢中になって、娘ネコとの別れのつらさを少し忘れることができました。

□ ネコのことで、思い出が

たくさんあります。十年ほど前、きたないノラネコがいました。ガリガリにやせてケガもしていました。そのネコはどうやらおなかに赤んばができたらしくて、ますますやせておなかだけが日々大きくなって来ました。私たちはその頃ノラネコに栄養のあるものを与えるほど豊かではなかったけれど、毎日おかずはお魚にして、残してはそのノラネコに食べさせました。

ある日、やっと歩けるようになった三匹の赤ちゃんを連れて、母ネコがお礼に来ました。警戒心は人一倍強い筈のノラネコからの恩返しに、私は愛は伝わるものと、何だか教えられてるようでした。もっともその後、段々年をとって、人の世ではそんなに愛が生易しいものではないことも知りましたが、いい思い出です。

□ 新聞などで人と人とのいいお話を見かけます。でも現実には私の周りでは汚いことや多いのです。動物や自然の中でなく、人とのふれあいの中に、ああいいな、と思えることにあってみたいこの頃です。

夏

大田区

岩田婉子

髪染めて

夏めく日ざしまぶしかり

霞障子

透けて満緑のせまり来る

鯽釣らせ

仔馬に乗らせ牧の夏

炎天の

道遮ぎる毛虫を行かせけり

土砂降りの

満緑模糊とパンカ浸し

月見草

昼もしばまず雨催ひ

「平等」について

新宿区

田中喜美子

「わいふ」140号の渡辺精一さんの「家事と主婦とわいふ」を面白く読み、改めて夫婦の平等について考えさせられた。

ところが考えれば考えるほど、渡辺さんの意見が、現代日本の「民主的」男性の代表意見のように思われてきて、コイツはアブナイゾ、という気持が入道雲のように拡がってきたのである。

大体私の入道雲はあんまりヴォルテージが高くなって、すさまじい雷鳴をとどろかせる、とはいかないのだが、せめて線香花火の火花でも散らしてみよう、とペンを取り上げることとなった。

まず渡辺氏の論旨を、再現してみよう。

あるパーティで、氏が、「夫の稼ぎの約半分は、妻の家事労働に負っていると考えてもよいだろう」と発言したところ、同席の夫たちは「俺の稼ぎはオレの力によるもの」といっせいに反撥し、妻たちは、「私はそんなふうにならばいいません」と、口を揃えた。このような言葉からは夫婦の平等を看とすることはできない。夫婦の平等とは、互いに相手を尊重しあうことであって、一方が他方を無視したり、他方が自己を卑下したりするところに、平等はないからである。

さて、たしかに現在の社会で、夫が一人前に働いていく上に、妻の働きが役に立っていない、とは言い切れない。モータリゼーションの日常を支える妻の家事労働の価値は、独身者の平均寿命が妻帯者より短いのをみても否定はできないので、前述の夫たちの言葉は、その限りにおいて、独善的と云ってもよいだろう。

こうした夫たちに、そしてあまりにも謙遜な妻たちに、渡辺氏が一人のヒューマニストとして苛立つ気持は、わからなくはないのである。しかし氏の善意そのもののうちに、私は何かキナ臭い匂いをかぐのである。（私のハナの穴はきつと大きすぎるのだ！）

氏は、憲法にうたわれている夫婦の平等は、夫婦は互いに分業関係に立つ、ということと、夫婦は人間として平等だ、という二つの含意を持つ、と云われている。

しかし、なぜ、夫婦は平等なのだろうか。

渡辺氏の論理を辿ってみよう。

氏はパーティの出席者全員が、仕事は夫、家事は妻、という分業形態をとっていることを知っている。そして妻の家事労働の価値を夫がみとめないことを怒っている。妻の貢献をみとめない夫は、即ち相手を尊重していない。妻はと云えば、自己卑下をしている。だから、夫婦間の平等は存在していないのだ。

分業の価値→夫婦相互によるその価値の認識→平等な夫婦関係の成立、というこの図式は、明治時代に森有礼などが輸入した良妻賢母主義と同質のものと云える。福沢諭吉も、夫を外務大臣、妻を内務大臣になぞらえて、両者はまったく対等な関係にあると主張しているが、現代の日本でも、夫婦という単位のもっともポピュラーな解釈は、このあたりにあるのではないだろうか。

どこかの銀行で行なったアンケートで、夫たちが、妻の家事労働の価値を平均三十二万円、と見積つたなどというニュースは、いささかマヌツバな感じもするが、家の嫁として、牛馬のようにこき使われながら、感謝されるどころか、卑められ、無視されていた女性のありかたが、ほとんど過去のものとなつたことを表わしている。このこと自体は、たしかに昔に比べれば、格段の進歩と云つてもよいだろう。私のひっかかるのは、妻は家事労働を行なっている、だから夫婦は平等なのである、という論理のすじみちなのである。

おとうさんは一家の大黒柱なんだから、家では私がサービスするのが当り前。と云う女性が多い。女は何といつても、亭主をえらくしなくちゃ、ウソよ。と云うひともある。そういうひとに限つて、まったくまめめしく家の中で働き、夫に「仕え」ている。

日常、妻がいなくては、ニツチもサツチもいかない。何といつても大切なのはカ！ちゃんだ。という夫がいる。妻には長生きしてもらいたい、死ぬのはオレが先、という男がいる。妻の死の悲しみを予想して耐えられないわけではない。

この夫たち、この妻たちは、相手を無視したり、軽視したりなどまつたくしていない。相手のはたらきをまぎれもなく認め、その限りにおいて心から相手を尊重している、とさえいえる。

この夫婦たちは、平等なのだろうか。こういう態度が、夫婦の相互尊重というものであろうか。

逆の場合を考えてみたい。

もし妻が、おそろしく不器用で、家事が下手くそだったらどうだろう。新聞マンガのゲータラママの如く、ゲータラだったらどうだろう。あるいは長患いで、ねたきりだったらどうだろうか。

反対に、昨日まで稼きまくっていたやり手の夫が、交通事故にでもあつて、働けなくなつたらどうだろう。会社が倒産して、失業してし

まったら、どうだろうか。

相手の働きがなかったら、相手を尊重しないでも当然なのだろうか。そうなれば、夫婦は平等でなくともよいのだろうか。

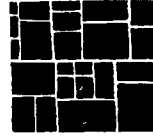
私はそうは思わない。疲辺さんも、そうは思われたいことだろう。

夫あるいは妻を、平等な人間としてみとめ、尊重するということが、それは相手に、これこれの働きがあるとか、しかしかの稼きがあるということは、まったく別の次元に属することなのである。

それ故私は、「俺の稼きは俺の力によるもの」と叫ぶ夫たちが、妻を平等な人間として扱っていない、とは必ずしも考えないのである。妻の家事労働の貢献度をそれほど評価しない夫たちも、妻の人間としての基本的平等を、あるいは把握しているかもしれないのだから。けれどもし彼らが、妻の労働の価値を、そのまま妻の人間としての価値としておきかえているのならば、彼らは能力主義に毒された、傲慢で浅薄なひとびとと呼ばれても致し方ないことだろう。

しかし人間の基本的な平等を心から信ずるということは、平等ということとは全くやすやすと口走られる現代においても、実はそれほどたやすいことではない。なぜならそれは、人間とは何であるか、人間はなぜ尊重されねばならないのか、ということへの基本的認識をぬきにしては、成立しえないものだからである。

教育勅語の明治日本においても、新憲法の戦後日本においても、西欧文明の底に流れるこの認識は、ついに根づくことはなかった。それが、私たちの産業が、さらに家庭までが、能力主義の白アリに、しらすしらすのあいだにかくも無惨に食いあらされてしまった大きな原因の一つであると思われるのである。



子連れある記

目黒区

中原 律子

先日、いつもの通り三才になる次男を連れて会合（「わいふの集い」一四〇号掲載）に出席しました。会合等の出席は、今回が初めてでしたが、40代と見られる先輩から、「子連れ」についての質問がありました。曰く、「子連れで出かけられるその行動力について、現代母親の感覚に大変不思議を感じる」等々。（何も子連れで来られると困る等と言うケチでは無かったらしい。自分達に出来ない事に対する、素直な疑問と受け取りました）だが、私は現代も20年前も、母親の意識に変化は無いと感じるし、おそらく20年前でも、健康と、体力と、少しの図太さと、出たいという願望を備えた母親は出ていたのではなからうか。事実その席上50代の先輩が子育て真最中に大学の講義を受けに行かれたという感動的なお話を聞かせて下さいました。

さて、私の個人的な「子連れ」反省記をここに書かせていただきます。私は昭和24年1月の生まれ。昭和44年秋結婚し、46年4月長男が誕生しました。時に22才3ヶ月。並居る友人たちの昭和元禄的大学生活や、ウーマンリブ的自活生活や、学究生活を横目で見ながらの妊娠、出産でありました。（当時、私の出産は物珍らしく悪友共が門前市をなして見に来たものです）

長男は我ら夫婦の子供らしく、四ヶ月で八千六百グラム七十七センチ

を越す超ジャンボベビーで、どうした訳か腕力だけは人並はずれて少ない私を泣かせました。従って、生れた時は子連れ外出等考えも出来なかったのですが、そこは主人の実家とはほぼ同居に近い生活（別棟）で、御年48才の有閑おばあちゃまを頼って心強く思ったものです。ところが、出産後少ししておばあちゃまの第一声が、「私はあなたが遊びに行く為や、その他勉強する為に、一切、子供は見ません。家に子供を連れて来るなら、ママが一緒になければダメですよ」という大ショック的、正に気絶しそうな発言だったのです。当時は「やられたー」と涙する程憎らしい発言でした。あんな閑な人も珍らしい位のサラリーマン夫人で、若くて、これから子供の一人二人生めそうな人でしたので、私の思う事も一理あったのです。

それからは、もう私も意地で、「あの人」には子供は預けまいと思いました。それなら近所に週二、三回子供を見て下さる方を、と思い「あの人」にバレない程度に探して見ました。でもさすが年の功、私のそんな気配を感じとり「人に預けたり、保育園に子供を入れたりして、働いたり、勉強するのなら、私が引取って育てます」と発言。又、してやられたり。私の若さと引きかえに得た長男を「あの人」なんかに取り立てるものですか。ム、ム、ム。もうこうなったら、計画していた勉強の方は中断。どこに行くにも子連れで行こうと、私の一大決心となりました。事実、デパート、里帰り、何でもどこでも、超ジャンボベビーつきでした。重くて、重くて、さすが出好きの私も、長男が一寸になるまでは家にジッとしておりましたが、意外な人物が子連れを実行してくれたのです。それは主人で、全く平気で三ヶ月の頃より、群馬栃木と、車で走り回ったものです。これには私の方が閉口しましたが、幸い何事も無く育ってくれました。これは車の機動力のためでしょうか。

一才を過ぎた時、こんなに育児にがんじがらめならば、早く子供を生んだ方が得みたい等と不敵な事を考えつき、さっそく次の子を作る事にしました。(私にとって一人っ子は考えられなかったので)計画通り妊娠。全く順調でしたが、この夏主人が学生共の親分みたいな顔をして、タダでヨーロッパ一周、一月(ひとつき)も留守にして、憎らしくていつか子供をおしつけて、ヨーロッパ位行ってやろうと秘かに思ったものでした。

日本に帰り十日程で、主人の新しい就職先の宿舎に引越ししましてこれで「あの人」との戦いも一段落ついたとホッとしました。でも良い事は続かず、二番目の子供の妊娠は重く重く私の体にのしかかって参りました。また一才の長男(13kg以上あるのです)を連れて、片道一時間余の通院はとてきつく、先生に注意される程なまけておりました。今思えば、団地の中で通院の時位見て下さる方はきつというらしきと思うのに、その事に気付かず、又こんな時こそ姑に見てもらえば良いのに、それにも気付かない程、頭が鈍く、堅意地になってしまったのです。妊娠中は又主人の実家より、私の入院中の子守りについて「大変だ大変だ」といつも小言を言われていたので、通院の事まで考えつかないのです。入院中は他に見てもらう人もいず、いたしかたなく主人の実家に父子共にお願いたしました。退院後は家政婦さんを雇い我が家で生活する計画を立てました。しかし狭い2Kの団地で、家政婦さんと一日中鼻つき合っている事はとても気兼ねで、家政婦さんの一言一言が気になって仕方なく一日でその生活もやめました。その後は私の実家からも来るように言われましたが、結局姉母姑が交代でやって参りまして、家事を片付けてくれました。全く私の不徳のいたす所でした。

その後は、団地内で良き友人に恵まれ、育児、家事、料理等に専心しておりました。又、長男3才2ヶ月次男1才4ヶ月の頃、主人が仕事で半年程日本を離れる事になりました。主人が留守の時は姑が我家

を良く訪れ、又子供たちも主人の実家へ遊びに行くのを楽しみにしておりました。しかし、考えてみれば先のヨーロッパ旅行と仕事とは言え今回の人も羨む旅行と比して見れば、幼い子供二人かかえ一人奮戦している私なのですから、もう絶対彼がヨーロッパへ着く頃行ってしまうと計画し、パスポート、旅行社との手続き等々、二人子連れでせっせと実行いたしました。全部完了し、さて後一週間程で出発という時、やっぱり主人の実家にも連絡しなければと思い、思い悩んで発表してみた所、子供を他人に預けるので非常不快であつたらしく、「日頃母親としての自覚の無き」やら私の欠点をあげ連ね、又、戦時中を思えば等々言われ、どうしても行くなら離縁と申し渡され、主人へ電話してもらちがあかず、泣く泣く中止となりました。

この一連の活動の結果、二人子供を連れでもどうにか動ける事が証明されました。そして、遅ればせながら主人が帰る一と月前より(ペビ―シッター付)会話塾へかよい始めました。結婚して五年、学びたい学びたいと思いつつ思うように出来ずにおりましたが、初めてやりたい事が出来、楽しくて楽しくて、結婚して一番楽しかった事は明泉会にかよった事と、公言しておりました。(勿論この事は主人の実家の人達は知りません)十月より三月までかよい続けとても厳しい先生の下で一番出来の悪い生徒としてしごかれました。又色々な立場にいる方とも知り合えて、共に励ましつつ勉強した事は素晴らしい体験でした。四月からのクラスも受講する予定でしたが、三月に三人目の子供を妊娠し、続ける事が難しくなってしまう無念でしたがやめる事となりました。(この子供は原因不明の流産で死んでしまいました)私の予後とも思わしく無く、又その後は子供の耳鼻科の病気が発見され通院に全精力を使っておりました。勉強の方はラジオ講座専門となりましたが、遅々として進まずという所です。同期生達のお話を羨しくも又、焦らずと聞いています。この四月より長男も私立保育園に通園し始め、いよいよ子連れも楽になって参りました。



「内助の夫」を読んで

目黒区

北村 七重

現在の私の考えとしては、姑が四十八才の時に私の長男を拒んだ事は、全く立派であったと思います。やっと老人の世話や、子供の世話から解放された姑が、私のような自己主張の強い若い嫁に、嫁の都合の良ように子守り役をやらされていたのでは、かなわないのではないのでしょうか。その点では彼女の言い分が尤もであると思います。現代の母親は自分の母親を子守り代りにするのが（姑も含めて）とても上手で、中年以降の人の立場や体力を無視する傾向にあります。これはもう一度考えてみる必要があると思うのですが……。又親達も喜んで（？）孫の面倒を見るので、親族以外の人に子供を預けるシステムが仲々発展しないのではないのでしょうか。システムばかりでなく、世間という目も冷たくなるのです。この際中年以降を第二の青春と思い人生を生きるおばあちゃんももっと出現して欲しいと思います。

私は他の人に子供を預ける事を考え、実行する機会を持たずに来た訳ですが、母親が世話をする事が百%安全で健康であるというのは迷信であるとも思います。スポック博士の育児書にあるように「疲れた母親が子供を見るのなら少しの間預けて、映画を見たり音楽を聞いたりして又明るく楽しい気持ちになって子供に接した方が良い」というのは甘えた事でしょうか。夫族の協力を、又三才迄は手元でというのは理想であるとは思いますが、人間には色々なチャンスがあり、それを生かしてこそ母親も自分の人生を生きるのではないのでしょうか。

141号の斎藤さんのお話を読んで、実にまめな方だと感心いたしました。家の中のことを、これだけパキパキ片づけていらっしゃる。私などは、とても足元にも及びません。家事のやり方から推しても、お仕事の面では、どんなにか御活躍のことと思います。心身ともに充実したお方とおみうけしました。こんな御主人に守られた奥様はおしあわせだと思えます。

我が家では私がよくよく疲労困憊の様子を見せまると、夫が手を貸してくれますが、夫は、実のところ家事は女の仕事と思い込んでおります。それ故、私が、こんな男性もいらっしゃる、と斎藤さんの話をいたしますと、実に妙な表情をみせました。消化の悪いものを口にしたかのようでした。そして、「タンナさんが働いている間、奥さんはどんな気持ちでいたの」という問いを發しました。考えてみますと、これは、もっともな問いではありません。

我が家で夫が斎藤さんのように動きまわったら、私はいてもたつてもいられぬ気持ちになり、寝ているのがつらいと思います。それは、夫が元来、家事をしない人だからです。

もし、夫が斎藤さんのように、自分がやるのが当然と思ってやっているのだったら、どうでしょう。心の中では、すまないと思いつつも、あえて口には出さず、この際、寝ていることを自分の務めと思つて、じっとしているかもしれません。そして、親兄弟が訪ねてきて「マアこの人は、ダンナさんばかり働かせて」なんて言つても、知らん顔をしているかもしれません。あるいは、それほど心強くはなくて、他人の眼を意識する時は、私も動きまわるでしょうか。

斎藤さんの奥様の御気持は、どんなものだったでしょう。今後、記事の中に、当の奥様の声を入れていただけないものかしらと思ひました。

特集

日本のおばあさん

悲しみはすでに
潜んでいる

君の

美しい二十才に
壮んな三十才に
豊かな四十才と
熟した五十才に

ひとは失う

逞しい体を

鋭い知力を

そして

愛する者さえも

ひとつひとつ

ひとは失う

若い日を彩った

あの豊かさを

輝きを

色と かおりとを

掘げよう

その暗い日のために

君の花弁の

一ひら 一ひらを

もっと明るく

もっと分厚く

その色と

輝きが

たそがれの空を

満たすため

夕映えの

雲と 風とを

彩るために



真砂澄子



いやでも老人になる

現代の親孝行のありかたを探ろう

森 幹 郎

1 「親孝行」とは何だろうか？

親孝行というのは、一体、どういうことなのだろうか？ まず始めに、この問題から考えてみたい。

岩波書店から発行されている新村出先生の広辞苑を開くと、「孝行」とは「親によく仕えること」とあり、ついで、「仕える」のところを開くと、「目上の人の身近にいてその用をたす」とある。つまり、「親孝行」とは、「親の身近にいて、よく、その用をたす」とことなのである。

また、三省堂の新明解国語辞典を見ると、「孝行」とは、「自分（たち）を育ててくれた親の言いつけをよく守り、また、老後には、そのめんどろをみること」とある。

いずれにしても、これが親孝行というものだとしたら、今日のわが国には、親不孝な子どもを持った老人の何と多いことであろうか。

私たちは、みずからを顧みて、辞典に説明されているような親孝行はしていないし、また、しようと思っても、なかなか

できるものではない。しかし、心の奥底には、そこはかとなく親に対するある種の感情のあるのを否定することはできないのである。

そこで、もう一度、親孝行とは何かということについて考えてみたい。

戦前から、戦後も昭和二〇年代の中頃まで、わが国は農業者で、働いている人たちの半数は農民等第一次産業の従業者であった。

この頃の家族の生活の仕方を見ると、いわゆる大家族制度と言われていたように、おじいさん・おばあさん、時には、ひいおじいさん・ひいおばあさんから、夫婦とその子どもまで何世代もの家族が一つの家に同居して生活するのが普通のことであった。従って、親の身近にいて、よく、その用をたし、また、そのめんどろをみるのは、決してそうむづかしいことではなく、むしろ、当然のことであった。

しかし、昭和三五年頃からの著しい経済発展の実が結んで、公害や自然破壊のマイナスも生じてはきたが、わが国は、世界にすぐれた経済大国となった。そして今では、一億総サラリー



マンなどとも言われ、昭和五〇年の国勢調査の結果によると、農民等第一次産業の従事者は、働いている人の中の一割ほどに過ぎない。

この今日の工業時代の家族の生活をみると、老親と子ども(夫婦)との別居の傾向が目立ち、核家族時代の到来などとも言われている。この核家族世帯が世帯総数の中に占める割合をみると、昭和三五年には四五%であったものが、昭和五〇年には六〇%に増加し、その数も一千万世帯から二千万世帯へと二倍にもなっている。一方、老人だけの世帯も五〇万世帯から一五〇万世帯へと三倍にも増加しているのである。

農業を中心とする社会というのは、農民が土地に定着して、生活に必要なものをみずから生産し、それを消費する社会である。一方、サラリーマン社会というのは、サラリーマンが、自分を雇ってくれる企業を求めて移動し、労働力を売って給料を得、それによって、生活に必要なものを購入する社会である。従って、労働力を少しでも高く買ってくれる企業(やさしくいえば、月給のいい会社)を求めて、移動することになる。現代が移動社会と言われるのは、こういう意味である。こうして、わが国の人口の大半は、新幹線の沿線に集ることになってしまった。

わが国における六五歳以上人口の割合(昭和四九年現在)をみると、全国平均では七・九%であるが、神奈川県(五・〇%)埼玉県(五・二%)大阪府(五・八%)東京都(五・九%)では六%を下廻っており、一方、島根県(一一・二%)高知県(一二・一%)鹿児島県(一一・三%)では首都圏の倍以上の高い割合を示している。このことは、青年たち(若年労働力)が首都圏、近畿圏に出てきたため、これらの地域では青年たちの割

合が多くなり、逆に、地方の農山村型の県では老人人口の割合が多くなったということである。

さて、こうなると、辞典に書いてあるような「親の身近にいて、よく、その用をたす」というようなことは、実際問題として、できなくなってくる。

わが国では、老親と子どもとの同居率は、また七五%前後という高率を示しているが、わが国などより、ずっと早くに農業国から工業国に移行している欧米の先進福祉諸国における老夫婦の子どもとの同居率をみると、デンマーク一五%、アメリカ一七%、イギリス二八%という低率になっている。

それにもかかわらず、これらの国では老夫婦と子ども夫婦との間の交流のきわめて密接なことが、各種の調査の結果から明らかにされている。こうした関係を、学者はcloseのbedrelationshipと評した。closeクローズというのは、心理的に親密な関係にある状態を言い、bedrelationshipセパレーションというのは、物理的、距離的に離れている状態である。まだ適当な日本語訳はないようだが、私は、便宜上これを「親密別居」と訳している。私は、この「親密別居」こそ、現代版の「親孝行」ではないかと思っているものである。

2 現代の「親孝行」とは老人福祉を推進することである。

先にも示したように、近年における核家族化の傾向には著しいものがあるが、それでもなお老人の七五%前後は子どもと同居している。つまり、子どもたちが、老人の身近にいて、その用を足し、そのめんどろをみているのである。

しかし、労働力というものは、そうそう高くは買ってはもら



えないものである（平たく言えば、給料というものは、そうたくさんはもらえないような仕組みになっているものである）。としたら、子ども夫婦にとっても、自分たちの生活を守るのがやっとで、老親の世話をするなどということは容易なことではない。昔、生活に必要なものは何でも、少なくとも、たべるものだけは自分たちでつくっていた農村の生活と、何でも買わなければならない、しかも、給料もそう多くはもらえない現代の生活とは、子どもの老親に対する態度がまるで一変してしまっただのである。

このような経済社会の農業社会から工業社会への変貌の過程で、老人の経済的な扶養は子どもの手を離れて、公的な責任へと移っていく。

だから、早く工業化した欧米先進諸国では、すでにドイツが一八八九年（明治二十二年）、デンマークが一八九一年（明治二十四年）、ニュージーランドが一八九八年（明治三十一年）にそれぞれ老齢年金の制度を創設したのを皮切りに、大半の国が一九二〇年（大正九年）までに老齢年金の制度を創設して、国が老親の扶養を引き受けることになったのである。実に半世紀以上も昔のことである。

一方、わが国において、国民年金法が制定され、国民皆年金の体制がしかれたのは昭和三四年のことであり、また二〇年もたっていないのである。

老人対策の中で、何が大事といって、子どもに頼らなくても生活のできる老齢年金をすべての老人に支給することよりも大事なことあるまいと思われる。老人にとって、経済問題さえ解決すれば、元氣である限りは、大方の心配は解決してしまうものだからである。

しかし、としをとるにつれて、心身の衰えてくるのは避けることのできないところであろう。その場合、子どもに、その用を足し、そのめんどろをみてもらうことのできる老親は、幸せである。しかし、住宅事情は依然よくないし、老人がひとり寝込むと、広くもない家の中は大変である。夫婦共稼ぎの家庭も最近では増えてきている。昔なら、親族の中の女手が入れ替り、立ち替り手伝いに来てくれたが、いまではお互いに離れ住んで、それもままにはならない。

つまり、子ども夫婦にとっても、老親の介護は容易なことではなくて、子どもがしてきたのである。こうして、老親の介護も公的な手に移っていく。これは、親不孝と評しなければならぬことなのだろうか。このところがドライに割り切れるか、どうかか老人問題を解く重要な鍵である。

昔、その子どもたちがしていた老人の介護は、いま、だんだんにホームヘルパーや老人ホームの寮母さんたちによって行なわれるようになった。ホームヘルパーの人口一〇万人に対する割合をみると、スウェーデンでは八二五人、ノルウェーでは五七七人、オランダでは四〇五人、イギリスでは一三八人という高い割合になっているのに、わが国では一〇人である。また、イギリスや北欧では、老人人口の三割から五割が老人ホームにはいつているのに、わが国では一割を少し上廻る程度である。ねたきり老人が三十五万人もいるというのに、これらの老人の世話をする特別養護老人ホームの定員は五万人にも満たない。

ということは、身体の不自由な老人がホームヘルパーの世話にならなくても、子どもが「身近にいて、よく、その用をたし、そのめんどろをみ」ているということであらうか。また、身体の不自由な老人を特別養護老人ホームに入れなくても、子ども



が「親孝行」をしているということであろうか。もちろん、そうした孝行息子、孝行娘を持った老人も少なくない。しかし一方同居はしているけれども、同居しているというだけのことですんなりよく用をたしてもらってもいいし、めんどうをみてもらってもいい老人も少なくないのである。

私は、老親が子どもと同居はしていても、あんまりよくめんどろをみてもらっていない国よりも、子どもとは別居していても、病弱な老人の介護は公的に引き受けている国の方が、親孝行の国ではないかと思うのである。というのは、ホームヘルパーの給料も、老人ホームの運営費も、みんな、子どもたちの納めた税金から出ているからである。要するに、老人福祉の推進のためにたくさんのお金を使っているということは、子ども世代が老親世代に対して親孝行をしているということである。現代社会において、われわれは、「親孝行」ということをこのように考えなければならないのではないだろうか？

3 老人福祉は老人をどこまで幸せにできるだろうか？

広辞苑や新明解国語辞典の中の「親孝行」の説明に共鳴し、欧米の福祉先進諸国の現状をにがしげに眺めている古典的な親孝行論者にとって、恰好の反撃材料は、デンマークやスウェーデンの老人の自殺率の高いことである。そして、「福祉国家になると、人は、何もすることがなくなり、人生に飽きて自殺をするようになる。社会福祉はあまり推進しない方が、人は人生にはげむようになる。そうすれば自殺率もそんなに高くならないであろう」などというのである。

しかし、すでに高い福祉水準に到達しているカナダ、ニュー

ジーランド、イギリス、ノルウェー、オランダなどの国の老人の自殺率はきわめて低い。この事実を何と説明したらいいのか。また、日本の老人の自殺率は、ほとんど毎年世界で一、二位で、昭和四十六年の国連統計によると第三位、四十七年では第二位となっている。日本はそんなに福祉の水準の高い国だろうか。

要するに、これらのことは、福祉の水準と老人の自殺率の高低とを結びつけるのは間違いだということ、そして、所詮、社会福祉も人の心を救うものではないということを教えているのである。社会福祉とはつまるところ、経済的、物質的な豊かさを保障するものでしかない。しかし、「人間」とは精神的な動物である。ここに、社会福祉の介入し得ない分野が存するのである。

北欧の社会で、今や老年期の最大の問題は、孤独に耐えることである、と言われているのは、こうしたことを言っているのである。福祉国家においては、最早、貧乏の問題も、住宅の問題も、治療の問題も、すべて子どもに代わって、社会が面倒をみてくれている。しかし、人生のたそがれに近づく、ひしひしと迫ってくる「孤独」。これとの戦いは、もはや、社会も国もどうにも手を貸すことのできないものではないだろうか。ここに、社会福祉の限界がある。

そもそも青年期とは獲得の時期である。体力、知力、経済力、地位、恋人、配偶者、子どもと、人それぞれにこれらのものをとしとともに手に入れていく。そしてやがて中年の坂を下りる頃から、人みなそれぞれにこれらのものを失っていくのである。

ここで特におばあちゃんと子どもとの関係について言及しておきたい。



日本の女は、久しい間、夫に、そして、とし老いては、子どもに依存してきた。それは経済的にも、また、心理的にもいえることである。依存というよりも、男とちがって、その胎に子どもを宿していたということのゆえに、子どもとの同一性を強く持つといった方が正しいかもしれない。

昭和四九年、総理府が全国四〇歳以上の男女一万人を対象にして行なった「老後の生活と意識に関する調査」によると、これまでの人生の充実感、現在の生活の満足感、これからの人生の見通しを決定的にきめるものが、子どもであることが知られている（経済力は全く関係がない）。つまり、子どものある人はいない人よりも、そして、子どもと同居している人は別居している人よりも、また、別居していても、文通・往来のある人はいない人よりも、これまでの人生は充実しており、そして、現在の生活に満足しており、また、これからの人生に明るい見通しを持っているのである。そして、この傾向は、おじいちゃんよりも、おばあちゃんの方に著しく見られるのである。心理的な子どもも依存、子どもも指向、子どもとの同一性ということである。

しかし、先にも述べたように、今や子どもにとって一番大切なものは、老親ではなくなってしまった。それは、妻であり、夫であり、また、その間に生まれた子どもなのである。昔風というならば、今や親不孝の時代である。

社会福祉は、子どもに去られた後の空虚さを埋めることはできない。空虚さを埋めるもの、それは老人自身の手によって、見出されなければならない。

4 長い老後をどう過すか？

先頃発表された昭和五〇年の簡易生命表によると、三〇歳の男の平均余命は四四年、同じく女は四八年。三五歳の男では三九年、女では四三年。四〇歳の男では三四年、女では三九年。四五歳の男では三〇年。女では三四年となっている。つまり、それより長く生きる人もあれば、それより早く死ぬ人もあるわけだが、いずれにしても、平均すれば、それぐらいは生きられるというのが平均余命である。

いま六五歳の老人の平均余命をみると、男では一四年、女では一七年となっている。正に長い長い老後というほかない。欧米で、老人問題とは、今や、長い時間への挑戦である、と言われているのはこのことである。

昔、老人が子ども夫婦や孫、ひ孫と一つ家に住み、一家を挙げて、農業に従事していた頃、老人には確固たる役割があった。おじいさんは、たとえ身体が弱ってきても、一家の戸主であり、また、その経験と智慧は農業生産には欠かすことのできないものであった。そして、村にあって、長老として村政治を支配していたのである。

しかし、今や、家の中に「老人の座」があるといえるだろうか。子どもと別居する老人はだんだん増え、工業生産は科学を土台として、老人に番を与えない。現代社会とは、老人に役割を与えない社会なのだろうか？

もし、そうだとするならば、役割のない人生なんか「無」に等しいといってもいい。ここに、ちがった次元での老人問題が新しく生まれてくる。

老年期は遺暦を迎えた日から、古稀のお祝いの日から、突然に始まるものでは決していない。老年期とは若き日からの一日一



日の積み重ねであることに気づかなければならない。

農業社会においては、余暇はヨカラぬことと教えられ、何もしないのは怠惰と非難されてきた。勤勉は美德であった。それは勤勉は生産の増大を意味していたからである。今の老人は、こうした時代に生きてきたのである。従って、今日、余暇時代と言われる時代に生きていても、余暇時間の過し方を知らないと言えよう。

しかし、今もみたように、老人には長い老後が待っている。老人とは正に余暇階級である。この長い余暇をどう過すか。これによって、老後の幸せはきまると言えよう。こうして、近年老人対策の中でも余暇対策がきわめて重視されてきた。

余暇活動をいろいろに分類することができると思うが、ここではレクリエーションと学習とボランティア活動の三つに分けてみたい。

老人クラブ活動は、どちらかといえばレクリエーションとしての比重が大きい。公民館を中心とする高齢者教室は学習活動としての比重が大きく、いずれも老後の生活を豊かにするものとして大きな意味を持っている。

それに対して、ボランティア活動については、老人層には余に関心がないようである。それは、従来老人というものは、他人から保護されるもので、他人のためにボランティア活動をするなどということは、飛んでもないことだというような考え方が老人層の中にも、その周囲にもあったからではないだろうか。総理府が昭和四八年、五〇歳以上の男女を対象に行なった「老人問題に関する世論調査」の中に、「あなたは、今後、何か社会奉仕的なことをしたいと思えますか、したいとは思いませんか」という質問がある。この結果をみると、「したい」という

ものは三八%、「したくない」というものは三〇%、「不明」が三二%となっている。次にこれを男女別にみると、「したい」ものは、男の四三%に対し、女では三四%となっている。六〇歳以上に限ってみると、男では四一%、女では三〇%と減少してくる。おしなべて言えることは、社会奉仕的なことをしたいと言うものは、女の方が少ないということである。

また、同じ調査で、毎日の暮らしの中の「生きがい」とか「生活のハリ」とかをたずねているが、五〇歳代の女の四三%、六〇歳以上の女の三六%は「息子や孫の成長など」と答えている。そして五〇歳代の女の二八%、六〇歳以上の女の四〇%は「ない」と答えており、残りが趣味・娯楽、仕事、社会活動と答えているのである。つまり、大ざっぱに言って、五〇歳以上の女の三分の一は子どもや孫の成長が生きがいであり、三分の一は生きがいはなく、残りの三分の一が僅かに趣味・娯楽、仕事、社会活動に生きがいを見出しているということである。

長い老後をどう過すか？ それは誰もきめてくれない。そして、誰も教えてくれない。自分自身でできるしかない。しかし、次の二つのことだけは言えそうである。

一つは、長い老後をどう過すのも自由である。しかし、人間関係を持ちながら、他人のために「何か」役に立っているという役割を果たしつつ生きていく方が幸せだということ。

そして、もう一つは、余暇時間の過し方というのは、老後、豊富な時間に直面して、急に形成されるのではなく、若き日からの経験の反復によって、その方向、その性格がきめられていくということである。

豊かな老後へのパスポートは、中年までに手に入れておかなければならぬ。

(長野大学教授)

おばあさん学生

千葉県 後藤里子

この八月で六十五才の誕生日を迎える。一般社会通念からみれば全くのおおばあさんであるが体力的にも感覚的にも私はあまり老いを意識しない。

四男二女の母親であり開業医の妻として戦後は薬局にも立ち全力投球でまさに奮闘した。新聞さえるくに読めぬ日も多かったが、当時としてはそれしか生きる道は選べなかったのだから悔いはない。しかしふと我に返った時、既に五十才という初老の自分に俄かに焦躁を覚えて、その後の生き方を真剣に考えた末、さっぱりと医院を廃業し九州からこの千葉県に移転した。末子が大学入学した年で五十二才であった。

その前から次々と子供が外国に出ていくようになり九州では往來に不便なことも大きな理由だったが、それより東京で学生時代を送った私が東京を恋い？つづけたのが決心を容易にさせたことも否めない。主人は少し離れた診療所に勤めることにした。家は捨て難く解体して運んだから住み心地は別に変らない。昨今の医療状態とちがって当時はほとんど毎晩夜間往診があったし、いろいろの意味で嫌な健保請求書きの仕事など、それらから解放されてにわかに得た自由に感謝感謝と喜んだものである。

勿論収入は激減した。この自由時間を躊躇なく英語の勉強に振り向けたのは、必要に迫られていたこともあるが、もともと好きだったからである。復習は子供のお古のリーダーから始めたが会話はラジオ放送に頼るだけ。その頃電車の中やホテルのロビー、

デパートで買物などの近くの外人に「エクズキューズミー」と話しかけたものである。友人の一人が私を「ミセスエクズキューズミー」と呼ぶ所以である。今では外国の一人歩きもあまり不安もなく娘のハズ達や孫ともどうやら通じるようになったが、しかし何といっても我が人生の最高傑作は「昨年の春から始めた教会の英学院通学である」。

週三回夜六時―八時、電車で一時間の距離は殊に冬の夜の帰途、普通ならかなり辛い筈である。しかし三年目の現在もいそいそと張り切って通っている。テストでBクラスに編入、今Cクラスの後期、来春卒業の予定である。但し成績がその圏内に入ればの話。四月新学期各クラス十七、八人が秋になると大抵半数となる。脱落、転勤、外国への出張や留学、何しろ学生というのは京葉工業地帯のサラリーマンを初め、英語の先生、大学生、医者、OLと多種多様、私のような「わいふ」の枠からはみ出たのは唯一人きり。秋頃までは控えている希望者を補充するがその後は減るのが加速度的で、今のクラスメートもBクラスからの仲間が自分を入れて三人きり。もっとももう一人の女子大生は飛びきり冴えていたのでCの前期で卒業してしまった。

シスターは実に優しく教えは実に厳しい。A、Bまでは落第も数人ある。落第させねば実力をつけた者に迷惑がかかるからである。だが皆大様なもので新学期のミーティングにAに残ったY君は「Bに行きたかったがシスターが是非まだ居てくれと云われるので」と自己紹介して笑わせた。何とも愉快な教室風景ではある。大会社のおエライさんK氏はミスをする、とチロツと舌を出して首をすくめる。半分禿げかけがいたずら坊主の童顔となる。東大出のJ君も発音を間違えては「貴方は落第」とやられて頭を掻きっぱなしだった。爆笑々々である。パーティー、ピクニック、ライフイングリッシュの一泊旅行、勿論これにはOBや新婚旧婚、

ペビーまで同伴の組もある。まさに英学院一家である。

今の若者は楽器演奏やる者も多く、フォークの好きな私は歌も楽しい。スキットは奇想天外な発想から観る方は椅子から転げ落ちる程の笑いだ。

この二年余彼等との交流の中に私には一つの発見がある。最近のジャーナリズムで云われるように受験勉強がクラスメートを敵にになってしまうほどではないにしても、今の学校事情では、友情が育ちにくいのは事実であろう。それがこの学校で思いがけぬ暖かい人間関係に触れ、やっと友情の何であるかが理解されてくるのではないだろうか。とにかく和気あいあいという雰囲気で皆多忙な中にプランを立てている。「勉強よりこの方がいい」などと云うフラチ者もいる。先日アメリカ旅行に出かけた組はその中の一人しかロスアンゼルスホテルの名を知らず、ハワイで半分はぐれたら、又サンフランシスコの街角でばったり会ったと云う。彼等は帰った時すぐくうまくしゃべれるようになっていた。体当たりだったのである。

さて来春卒業後は？ 勿論生涯の勉強だが。私は最初勉強の目的だけで入学したので外の事は別に考えも期待もなかった。しかし今では英語を教わるシスターのお人柄を通して、やっと自分の魂の安息の場に辿り得たという思いでいる。授業に宗教の導入は一切ないが、自分の人生の徑に静かだが輝く灯を見つけたという確信である。

勿論どの子の生活にもノータッチ、同居などさらさら考えていない。五才上の主人が先に逝くとしても私はこの広い家に一人で動ける間、暮すつもり。一晚でぼくくり、或る朝死んでいるのなら天国ではないか。そうありたいと願っている。長病いなら又それで子供達それぞれに生活があるのだから、見て貰えぬ場合の方を考えねばなるまい。入院もよし、一番世話になる人なら他人で

も自分の持っている財産らしきもの一切与えてもいいのだから。既に心当りもある。

私の通学で主人は一体何を食べているんでしょう？ ですって？ もう紙数がオーバーしました。女盛りのこの「わいふ」会員の皆さん、今貴方が通かほるか遠いと思われる六十五才は意外に近いのです。この拙い一文が何か御参考になればと念じております。

祖母のこと

横須賀市 蜂谷 まさよ

小さい頃おばあさんは男だと思っていた。もっともそう思っていたのは父方の祖母であって、小柄で色白でやさしかった母方の祖母は女だと思っていた。父方のその祖母は身体つきもがっしりしていたし、昔の女の人がそうであったように、いつも黒っぽい着物ばかり着ていたからだろう。性格もきつく、私も本気でぶたれたり、手の指にお灸をすえられたりしたことがある。

私が一人娘で我儘だったからかもしれないが、五黄のとら年の所以か理智的ではあっても、冷たい所のある人であったように思う。昭和十七年の秋七十七才で亡くなるまで母に家内の一切をまかせず、毎月の食費のみを渡して賄わせた。私の父である一人息子を昭和七年に亡くしてからも目付役として一家眷属の長としてにらみをきかせていたが、それは祖母が士族の学者の家に嫁いで以来続いていることとはいえ、女の細腕で一家を成す事は並大抵ではなかったと思う。子供心にもなにか普通の家とは違う雰囲気を感じてはいた。

ただひたすらに耐えしのんだであろう母の苦労が分るようになる

ったのは私自身嫁となって他家へ入ってからだが、せめて祖母より一日でもあとから死なせたいと親類の人達が云っていたのも空しく、同じ年に三ヶ月早く亡くなった母を、それでも祖母は頼りにしていたのか、息子の亡くなった時涙もみせず、部屋を掃除し片つけて弔問客にそなえた祖母も母の亡くなった時は涙を流した。

六人姉弟の長女であり、したがって甥や姪も多勢いてその人達のめんどうもよくみだし、知人、隣人にはそれはよく気のつく世話すきの人であった。背もその頃の人としては高い方で、なにより器量自慢で、洗顔は糠と黒砂糖、そのあと化粧水とクリームをつける、それから組立状の鏡を縁側に出して、真白い糸で根本をキリリと結んで髪を結う。それは死ぬまで続いた。

そんなお洒落だから着る物も凝っていて母等はほんの僅かばかりの着物しかなかったけれど、祖母の死後は「あの縦じぼりの羽織とつづれの帯」「あの結城の着物と友禅の長じゅばん」と形見分けの注文が出てびっくりしたし、分けたあとまだいくつもの長持にびっしりとつまっていた。

表面的な事はこの位として、やはり女丈夫であったことは間違いない、学者肌の舅や夫は家計には無頓着であつたらうし、家中の事はもとより、対外的な事一切が祖母の肩にかかっていたのだから、強くならざるを得なかったのだろう。生活は地味で、ふだんはつましかなかったが、この時という折は生きたお金を使う人であった。又その頃の老女としては珍しく本も新聞もよみ、なんでもよく知っていて、道理に合ったしっかりした考えを持っていたように思うが、嫁に対しては矢張り姑であることを百%生かす人であった。女の業をつくづく思う。

父は我儘で官吏としてつとめた期間は短かく、勝手気儘にくらしていたから、流石の祖母も一人息子には甘かつたらしい。それ

だけ母の苦労は多く、人々に同情された。母は優しい人であつたから祖母にたてつくことはなく、人知れず涙を流したのではないかと思う。

ユーモアを解さなかったし、世のおばあさんのように昔ばなしをしてくれるとか、お人形の着物を縫ってくれるとかそんなやさしい事はしてくれなかったけれど、きびしいその無言の教えの数々は、結婚後、人並以上の苦労をしたと思える私がかへてたれずがらばる事が出来たのも、あの祖母から受つたなにかが心に沁みこんでいたのだと思う。

いつの間にか五人の孫のおばあさんになってしまったが、何事をもとても祖母のようにはいかない。いまだに知りません、出来ませんの多い私に、「いい年をして仕様がないわね。又お灸をすえるよ」とあの世から云っているかもしれない。優しくても何時も私をかばってくれた母方の祖母を思い出す時、きびしかった父方の祖母をも今はしみじみなつかしく思うのである。

「おばあさん」と呼ばれる頃には

八尾市 西本慶子

(五十一才)

「おばあさん」とよばれる年令は、六十五才以上なのかなあとおペンを持ちながら考える。私は、それまではまだ大分に時間があるようだ。年令よりは幾分、若く見られることの気安さもあって、何か人事のように「おばあさん」という文字を見つめながら、昨年、結婚した娘に子どもができれば、否応なしに「おばあさん」と呼ばれるんじゃないかと愕然としたりする。職場に居たときは、もう二十代の後半から「ババァー」などと、口の悪い男性から言

われたこともある。

煮ても焼いても喰えないとか、化けて出るのは女の方が多いとか、まあ、女の古びたものに世間の風は冷たい。「魅力的なおばあさん」——そんな人を自分の囲りから探そうとしても、これと見当らないところを見ると、やはり、それは非常にむずかしいことなのだろう。老醜という言葉通り、思わず目を伏せなくなる老人が随分多い。(女に限らない。)貧困、病苦、とげとげしい人間関係、限らない人間の業苦の中で、老いの身をもてあましている老人の方が多だろう。一時、「恍惚の人」が多くの話題をまいたが、私はおわりまで読む気がしなかった。しかし、その老醜から目をそらす気はない。老醜とは人間が人間である極致の姿だと思うからだ。小野小町が最後には野末に果てて、そのしゃりこうべの落ちくぼんだ眼孔に、すすきの穂がゆれていたような、絶世の美女才女ともてはやされた女の終りの姿の凄じさは、それ故に人の心を震わすのであろう。それは他人事ではなく、大なり小なり吾が身の果ての姿であるからだ。

人間というものも、生物の一環と考えるならば、その五衰凋落は自然の摂理であり嘆くには及ばぬ筈で、花は咲き散り、虫は交尾して産卵して一生を終え、強きは栄え弱きは衰える。吾が身もまた、華やかにひらき生きそして衰退してゆく。唯、人間なるが故に、老後の在り方というもののへ不安にかりたてられ、それが行き過ぎると老醜というものの塊りになってしまふのであろうか。しかもその老醜を冷静な目でみつめることの出来る老人は少ない。それは、恐しいことであり、心の冷え冷えとする思いではあるけれど、いずれどの人も通らねばならぬ宿命である。日本のおばあさんに自殺が多いということも、その辺にあるのではないか。子どもべったりの日本の女の姿勢には、その冷静な目さがない。子ども子どもと狂奔して、大学の入学式まで親がついていくとい

う。子ばなれの遅さが自分の老後の独立をはばんでしまう。子どもというものが、親の庇護を必要とする時期は、そう長くない。子どもが自分の腕の中から既に遠くへ飛び去っていることに気付かないから、「おばあさん」といわれる年になっても、まだ若い嫁との問題に悩まねばならない。

子どもは生まれたときから決して親のものではなく、確かな預りものである。それは或る期間、親の生き甲斐とさえ思われる時もあるが、決して親そのものではない。まして親の所有物ではない。彼らは自分の生命をもち、自分の心をもち、自分の生活をもっている新しい人間なのである。子どもたちがそれぞれに独立したとき、その父にも母にも、爽やかな第三の人生があつてよい筈である。夫とふたりの、或は自分ひとりの、所謂「老後」というものをみつめて、確かな歩みをふみ出してよい筈である。しかし何人の女がそれをなし得るだろうか。身体的なこと、経済的なこと、その他様々の問題がからんで、縛りあげられてしまう。老いの身を卑屈にせず、老人らしい美しさを保ちながら、静かに余生を楽しむ、ひっそりと死んでゆきたい——と願わぬ女はなからう。毎日の新聞の死亡欄を見るとき、あの短い、紙面の片すみの記事に、人間の生の凄じさと死の冷酷さを見ずにはおかない。いずれの人の上にも正確に訪れる死の足音を私は毎日のあの欄に感じる。はげしい世の渦の中でひとりの女も老いて死んでゆく——私は、それをじっと見つめる目がほしい。そのときに、「おばあさん」としての自分の生き方が、それなりにずっと浮かびあがって来ると思う。

私自身、まだ「おばあさん」と呼ばれる年ではない。しかし、人生の返り点はもうはるかに過ぎてしまった。平均寿命まで生きるとしても、あの時間は長くない。自分の老いの生き方は、自分ではっきり決めて生きたい。

ふたりの子どもたちは、幸いに上手に、私の手元から飛び立った。若い二羽のジョナサンは、姿も見えない。

雨も小降りになったようだ。大阪の高台にある小さな古い寺の庭のくちなしが一そう白く匂っていることだろう。万葉集をかかえて土曜講座に出かけよう。

老い行く日々

逗子市 石原宗里

娘が新婚旅行より帰って来て数日後、私はこの世の終りかと思うような目まいに襲われた。医師より低血圧と強度の疲労と云われ、精密検査をした結果、コレステロール三百二十、首の骨の老化等で、内科、整形外科に通院している。病院で診察を待っている人々に、何と意外にも私と同じ年代（五十―六十才）の患者が多いことか。そして共通の悩みを持っている事に気がついた。

子供が社会人として巣立って行った後、大きな事業を成し上げた満足感にひたり、母として喜びを味わっている人はいるのであろうか。

永い月日、子供中心、これ忍耐の生活を守り、自己満足に陥っている多くの親、考えてみれば資産を費し、無理に大学を出させてこれ程大きな犠牲的精神はないであろう。

あえて云いたい。子供を過保護に、自分本意なエゴイズムに育てては因果応報あるのみと。

我が家が建っている崖にもきが背のびする頃、新潟から母が訪れた。おみやげの私の好物「草だんご」は元々あまり上手でないが、よもぎと粉のこね合せは一層母の年の憂いを感じさせた。

「こんなに持って来なくても」「皆に食べさせたいから」糖尿病の叔母には餡をぬいて、七十九才の老婆が四キロ近い荷物を一人で持って来るフアイトに私は驚いた。

全く明治の女は強いのかも知れない。五十の年を迎え、軍医の夫と死別、目下父の恩給のみで生活をし、広い草深い田舎家で一人草取り、菜園を楽しんでいる。私の記憶するところで父と生活をした事は何年あったであろう。父は常に野戦の病院長で送ったようである。母は独り居の生活にすっかり馴らされていたようであった。十二月のそれぞれの音を後にして我が家へ避寒に滞在する。そして名古屋に住む姉、妹、あるいは叔母達の所へ遊びに行くのを年間行事としているのだ。

自由業である姉や妹の家庭と、我がサラリーマンの家庭を比べ、言いたい事をいって平然としている。「到る所青山有り」で我が家の延長と心得、私は母が帰った後心身共に疲れるのである。

知人達はすべて母程幸せな人はないという。

母の妹である七十七才の叔母が脳血栓である日突然たおれた。

恍惚になった叔父のお守りと家の普請づかれが原因ときいた。あの時代にはめずらしく教育ママで、子供達四人は小学生時代より家庭教師をつけ、本来優秀なのか、息子二人、娘二人も有名大学を卒業、目下立派な社会人であるが、娘達は外国に、息子達は都内に住んでいるが、うまく行かなかった。姑と嫁の仲が――。

叔母は母と同じで、酒造家に育ち、多くの手伝人にかこまれ、我ままに「おんば日傘育ち」で気性誠にはげしく常に不平不満を知人にぶつけていた。その昔、小町娘といわれた京美人は今おもかげもなく、長寿のおしどり夫婦も決して幸せとは思われない。

親より巣立ち羽ばたいて行った若者達は何となくましく、私の若い世代と全く異り文明の恩顧によくし楽しく生きていることかぬけがらと自負し、受け身を背おい、子供達から夢と期待をう

らぎられない前に、マイペースで美しく老いる事の具体化を。
しよせん人間の短い生涯のしめくりを急ごう。

魅力的なおばあさん

高知市 田原多美子

四年程前、私が東京に住んでいた時のことである。私は前方から来たおばあさんに思わず気をとられてしまった。そしてすれ違ったあとも、とうとう振り返ってしまった。というのは、そのおばあさんがあまりにも魅力的だったからである。

きれいに梳かれた髪、深い上品な柄の着物と帯、小さな袋とこもりがさを持って、どこかへお出かけという風でしたが、それがとてもかわいく、美しかったのである。嬉しそうな様子で、こちらまで幸せな感じが伝わってくるようであった。私はこのおばあさんはきつとご家族の方たちに本当に大切にされているにちがいないと思った。

しかし、やはり不幸なおばあさんもいる。以前近所に住んでいたおばあさんは、息子夫婦と折合いがわるく、体をこわして病院通いをしていたが、家族に何の世話も受けていないようであった。私も気の毒に思って、時どき話相手になったこともあるが、その内容は不平と悪口が主で感謝の気持ちのないものであった。そういう話をするとう人間の顔はよけい醜くゆがむものであるが、そのおばあさんの顔もいっそう老醜を感じさせた。

私は思う。年をとってみじめになるのは、その人自身の生活態度にも問題がある。もう少し感謝の気持ちを表わすかわいなお年寄であつたら、周囲の者に疎んじられることもないだろう。

家族に手作りのチョッキなどを作ってもらって着ている幸せそうなおばあさんは、話をしても決して不快なことを言わない。お年寄の智慧からか、ささいなことでもとても有難がり、大げさにひとをほめたりして、聞く方を喜ばせる。だから、こちらからも「おばあちゃん、お元気ですか」と心から声をかけなくなってしまう。

最近のニュースに、女の寿命は約七十七才とあった。私もそれまで生きられればいやが応でもおばあさんになる。やはり厭がられるおばあさんよりも、魅力的で好かれるおばあさんになりたいものである。しかしそれは大いに自分自身の生き方にかかっている。怠惰に流れず、不平を言わず、感謝の気持ちをもつよう努力しなければならない——と思う。

なりたいと思うおばあさん

大津市 中野桂子

いつも静かに微笑しながら若い人たちと一緒に絵筆をうごかして、ろうけつ染に余念のないおばあさんをその群れの中に見つけた時、私は「年をとることはみじくなることではない」と安心した。その人は、週一回ずつ集って専門家に指導をうけながらいろいろな作品をつくっている「ろうけつ染グループ」の一員、はじめ素人ばかりであったそのグループの作品がいつか「市展」での王座を占めるようになり、そのおばあさんの力作が同じように並んだ時、私は「年をとっても技が劣るということはない」とうれしくなった。

その人は、たしかに「ご隠居さん」であり、七十何才かであっ

て、健康で、時間もある人であったが、何と十二人の子供さんをそれぞれ立派に育てあげられた方だと聞いて、ただ頭が下がったことであった。そのうちの何人かがお医者さんで、いろいろ専門があり、「あの〇〇内科も、あの〇〇外科も」と数えあげては、おばあさんの笑顔を見直したことだった。

もうひとりのおばあさん。かつて（十五年ぐらい前）私が図書室の貸出係をしていた時のこと、新刊小説をはじめ、日本、世界の古典や近代の全集ものを片端から借り出しては、期間内（一週間）に必ず交換されるおばあさんがあった。はじめのうちはただ何となく観察していたが、遂に若いもの以上の読書力にこちらが恥しくなってきた。この人は、決してくどくどと喋る人ではなくちょっと微笑んで、「これ返します」「これ借ります」としかおっしゃらない。それでもいつも顔を合わす間柄ゆえ、いつか短い会話をするようになった。私もあまり話し好きでない方なので会話の調子がうまく合って、その人の来られる日を待つようになった。いく月か経て重ねた会話を集約すると、その人は息子夫婦、孫と同居であったが、おばあさんとして孫べったりのいわゆる「おばあちゃん」ではないこと、嫁の、子供に対する教育や躾に対して非常に客観的であること。ある時「子育てということとは若い人たちには大変なことなのね」とおっしゃるので、息子さんの継母かしら———と思っただけはなくて、ある教育家の未亡人であった。「頼まれたことだけはするけど、あとは本を読んでいるの」———きっと本の好きなお孫さんが育つだろう。私の姑がこんな人だったら、日日是好日だなと思った。

「なりたくないおばあさん」の見本は、あまり周囲に多すぎて文字にするとは悲しくなりそうだからやめておく。そして、そんなおばあさんがどのようにしてつくられてきたか———その歴史を考えると、私たちの生きる姿勢が次の世代を生きる女たちに、よ

きにつけ悪しきにつけ大きな影響を与えることを思い、責任重大だな、と思うのだった。

母を語る

枚方市 北本柳子

母は六十六才、三十八才でおばあちゃんになったのだから、私の年ではおばあちゃんになって四年目、二人の孫がありました。もし今、私が「おばあちゃん」と呼ばれる立場にあるとすれば———と思うと、やっぱり抵抗を感じるから、三十代のおばあちゃんは、どう考えてもちょっと可哀相じゃないかしら。私だったら、別の呼ばせ方をしていたかもしれない。

人間だれしも、何らかの形で、大なり小なり、苦労というか、悩み事はついて廻るものだと思うけれど、母は大の方だったと思う。というのも、私をつれての再婚なのです。二十五才で、姉、兄二人、そして私と一度に四人の子持となったのです。

私なんか、二人の子供を育てるのに何度母に電話したことが。子供が順次大きくなっても、その時その時を愚痴りながらたまたま中で、子育ての時代を過したのとは大ちがいが、母には頭が上がりません。

父も母も岐阜県の生れです。

母の里では、今でこそ車で工場勤めをする者がほとんどで、現金収入もあり、村には、よろず屋に変わってスーパーもできて、生活に潤いあり、町と田舎という隔りがせばまっておりますが、当時は山間の土地に、わずかばかりの米を作り、麦と合わせて一年中の主食としてました。副食は勿論自給自足で。現金収入といえ

は、蚕のまゆと冬の炭焼きぐらいでした。

娘を嫁がせる時は、山の木を売って仕度をしたというが、前を見て、後を見て、山、山、山、何しろ駅から約四キロ、山をひとつ越さなければ母の実家にたどりつけない。したがって日照時間も短かく、俗にいう貧村なのです。

不憫な子ほど可愛いというが、初婚に破れた母に、父母（祖父・母）は、何とか人並にと心を痛め、再婚の時も、初婚の時と変らない仕度で送り出してくれた親心に、今度こそは、がんばろう、がんばらなくちゃ、と、私を抱きしめたという。

郡上郡美並村から、美濃市御手洗の父の家に嫁いだのは、私が一才の秋の或る日。のどかなローカル線に乗って、川面に映る紅葉を眺めながら、嫁いだ日が忘れられないという。

ただ広い母屋で、結婚式と披露宴をかねた内輪だけのささやかな酒盛りが行なわれた。夜更けて、姑に案内されて我が家につき、神棚に詣で、振り返ると赤いランドセルが目についた。それが姉の物とは。私より五つ年上の男の子がひとりだけと聞いていた母は、直感で（もしや）と思った。問い正す言葉もない母に、姑はただ「よろしくたのむ」と泣きくずれたという。そして、もうひとり男の子がいるんだと聞かされた。

父の里は、美濃紙（手すき）の産地で、家の働き手は女で、嫁入り前の娘は競って早起きする。というのも、身が丈夫でよく働くというのが結婚の第一の条件なのだからである。その働き手である兄弟たちの母は、長わずらいの末、この世を去ったというから、姉たちも、どんなにか幼い心を痛めただろう。あの借金だらけの家の後妻は、馬鹿か、かたわか？ と村の者は噂したという。その後になってどこからともなく、耳に入ってきたという。

背は百五十センチ、色黒でよく肥っている姿は、どうみても美という言葉とは、縁が遠いが丈夫なのが取り得、紙すきは全く出

来ないが、とにかくよく働いた。一日中、針と糸を持ち、一日に袷を二枚ずつ縫ったというから、手は早い方だが人の倍も出来るわけではない。一度でいいからゆっくり寝たいというのを、物心ついてからよく耳にした。又、母は髪結（日本髪）さんでもあった。着付けもした。これらが生活の糧であった。

男は紙すきの材料を買いに行ったり、それらを煮たりして準備をする。又、村に困ったことが起ると出かけて行く。実権は男が握り、労働はすべて女がしていた。

紙すきという仕事がなくなった父は、仕方なく畑をついたり、時には家事の補助をしたりしていた。さぞつらかったと思う。

『何とかしなくては』と考えあぐねた父の思いつきは芝居であった。村に役者が来るなんてことは何年ぶりかで、よい思いつきであった。父は急に忙しくなり、母は針仕事から離れ、準備にかけずり回るのがむしろ楽しかったらしい。一日目、二日目は大盛況であった。この分ならば……と喜んでいたら、三日目から雨、次の日も次の日も。丸太がけの小屋は雨が降るとお手上げである。朝は晴れているのに夕方になるとポツリポツリ。それでも役者の食事は作らなければならない。十日の契約のうち、四日しか興業ができず、失敗に終わって借金はふえた。

お人好しで、涙もろい母は、「何とかなるさ」が口ぐせで、一夜明けるとケロリと忘れる都合のよい性格の持ち主でもあった。田畑を売って借金を返し、大阪でやり直したいという父について堺市に住んで三十年余り、作ってもらった嫁入道具は、何ひとつとして残っていない。そして、なきぬ仲のむずかしさ……。母の半生は終わった。

しかし母は、いつも良い友達に恵まれていた。「遠い親戚より近い他人」というが、いつも自然に集まって来てくれる、と喜んでいる。

今も針は離していない。その仕立代で、おどりを習い、積立て旅行をし、それらの友達が多いこと。とにかく人とのふれあいの大すきなおばあちゃんなのです。昨夜の残り物でもためらいもなく出して、一緒に昼食をしたりする。兄嫁も勤めているので結構忙しいのに、近所の方が病氣だと聞くと日参する。お産を手伝い、行水させた子供も何人か数え切れないし、今また、縁結びの橋渡しを親から頼まれて、西に東に奔走している。

内孫のPTA、子供会の行事、もう小学校は卒業したが、夏休みのラジオ体操にも。私には、到底まねはできない。

時には、出すぎた行動もあっただろうし、勿論失敗もあっただろう。そして裏切られた話も何度か。——今日も電話してみると、どこへ出かけたのか朝からいらないという。

ちょっぴり、はすかしい気さえるおばあちゃんなのです。

長寿日本一百十四才

河本にわさんを訪ねて

滋賀県 三矢久子

河本にわさん

文久三年八月五日生れ

(西暦一八六二年)

八人の子ども。孫十八人。

ひ孫四十一人。ひひ孫二十五人。

住所 滋賀県高島郡安曇川町船木

——おばあちゃん こんにちは。

——「おう、おう、こんなババの所へようきてな」

——お元気ですネ。

「耳がナア、やっぱし 遠うなつてな」

——百十四才におなりですね……ほんとにおめでたいですね。

「いつでもほとけさんと一緒」

——テレビなど見るのですか……。

「見ますナア——相撲が好きでな……」

——おばあちゃんのお氣に入りの力士は誰かぜひききたいですね。

「朝夕じゃったなあ……」

——たくましいのがお氣に入りなんですネ。

「大鵬も良かったなあ……」

——テレビがお好きなのはいいけれど目がつかれませんか。

「目も悪うなつてくるけど、まだ不自由なことはいない」

——裁縫もしてらしたんですか……。

「こないだまでな、もう、でけんな」

——おばあちゃん、毎日のお食事はおいしく召上っていますか。

「おいしくいたいています。カレーはおいしいなあ……ミルクも好きでなあ」

——牛乳？ おすきですか。

——「八十年前からなあ……」

——私も牛乳をのんだら、おばあちゃんの長寿にあやかれるかしれませんね。

「なあんもしてない。ふつう。働いて、子も産んで。病氣はせんかったけど」

——おばあちゃん、旅行は、もう行けませんか？

「いや、いや、高野山かて行つたし、本願寺もお参りした。高野山の石童丸の話も、ちゃんとおぼえているし、今でも誰にでもきかせられるわなア」

——おばあちゃん、おつかれが出るといけませんからこれで失礼いたします。もっともっと長生きして世界一になつて下さいね。

あなたは “恍惚の人”にならない

新福尚武教授に聞く

「元気で出かけたのに夜になっても帰らないので大騒ぎ。とんでもない遠い交番で見つかったけど……本人は家を忘れたってケロリとしているの」

「うちのおばアちゃん、近頃お客さまの顔さえ見ればグチばかり。体裁がわるくて……」等

こんなのはほんの序の口で、全国的に見れば何百万にも達する家庭が、もっと深刻な状態の老人を抱えて悩んでいる。

けれどもほとんどの場合、

「年を取ればぼけるのは当たり前。どうしようもない」と諦めて、何ひとつ手を打たずにいるのが現状ではないだろうか。

「ボケは大部分は病気。したがって治りうるもの」

慈恵医大の新福尚武教授のこの言葉は、私たちに希望を抱かせてくれる。

四十年後には老人人口が二倍になるという高齢化社会が待ち構えている。私たちは老人についての固定観念を打ちやぶり、新しい価値観に立って老人問題をみつめ直す時期にきているのではないだろうか。

（林 慶子）

不必要にボケて行く

年をとっていくと、さけることの出来ない宿命として、いくらかの人にはボケて行く。これはやむを得ないことです。

しかし、これまで考えられていたように、非常に多くの人ではありません。

ボケてしまった人を見ると、今までそれに対する準備とか予防とか治療をしていたならばこれほどまでにならないかたに違いない、と思われる人が非常に多い。

つまり、予防も可能、治療も可能のボケが多いと言うことですね。

自分の家を忘れたり、今までと性格が異ってきたりするのは、脳動脈硬化と老人に多い貧血や低血圧による発症が多く、適切な治療とともに、まわりで老人の心を支えてあげれば、大部分の症状はおさまります。

老人は自分を理解してくれないことに腹を立てる。その欲求不満が病状を悪化させ、ますます家族に嫌われる。それが心を傷つけ、人格荒廃まで落ちこむ、といったことが多い。

もっともボケてしまった人は自分では分らないわけですから、ボケない前に自分の精神健康に責任をもって管理してゆく態度が必要ですね。これは早ければ早いほどよく、おそくとも五十才前でなくてはいいけません。

と言うのは、脳の動脈硬化は四十代から徐々に起ってきますから。

脳の動脈硬化が進むと血液の循環が悪くなり血液と組織との栄養や酸素の交換が悪くなるため、脳組織が栄養不良になる。

脳の働きが悪くなってきてボケる。

そのままに放っておくと、脳卒中を起す。

脳卒中といっても、血管が破れる「脳内出血」、血管がつまる「脳硬塞」、動脈にできたコブが破裂する「くも膜下出血」など、さまざまな種類がある。

脳内出血は、比較的若い高血圧の人に多いが、脳硬塞は、年をとった人に多い。

しかし、日頃から血圧亢進や動脈硬化の進行をコントロールしておけば防止は確実なので、から、脳卒中の大部分は不注意の産物と言えます。

ボケの中にも、脳がこわれて萎縮する病気を痴呆と云い、これは治らないことが多い。

しかし、痴呆のようにみえてはんものの痴呆でない仮性痴呆は治療すると治ります。

いずれにしても、専門の医者にかかり、十分検査することが必要です。

年寄りのボケは致し方ないと放置しておくのもっともよくないことです。

今までは体の健康については、寿命を延ばす

ことなどに一生懸命だったが、頭、健康にはそれほど関心がもたれなかった。

長生きはしても、多くの人は不必要にボケていつていけるわけです。

女に多い半ボケ

しかし、ボケの中には日常頭を使わないことが原因なのも多い。所謂、半ボケですね。

男より女の人に早くボケる人が多く、また都会のおばあさんより田舎のおばあさんに頭の衰えがひどい人が多い。

知能は二十五才頃から下り坂と言われ、確かに年につれ衰えやすくなる。しかし、或る人ではそれが強められ、他の人ではそれが抑えられる。

自然のままに放って置くと、すべり落ちる勢いに拍車をかける人と、歯止めをする人との間に、いつかたいへんな差が生じてしまいます。

しかし、記憶力とか物忘れとかの知能の衰えの代りに、若い時には見られなかった総合的な判断力が備わってきますから、年をとった人たちは、もっと自信をもっているですね。

ボケは記憶力とか知能を中心としたことです。が、もっと大切なのは知的な働きより性格です。

家族とか、社会の一員として生きるためにはその人の性格が問題で、この性格は生活の仕方

とか、心がけによって大きく左右されます。

自己中心的でひがみっぽく、けちで、ぐちっぽく、陰気くさく、厚かましいのが老人の性格として考えられてきましたが、これは大変な間違いですね。

老人の特性では絶対にありません。

それは、老人の生活が健康な状態でないからあらわれて来た性格の偏りです。

姑と嫁との問題も、性格の問題としてとらえられていますが、見方を変えて、姑と嫁の生活の問題と考えた方がよい。

つまり生活が健康でないと性格も健康でなくなるという事です。

知能と同じように、性格も放っておくと今まで老人の性格と思われていたような低いレベルでまともたがる。

老人に起こる性格の変化の大部分は、環境社会的、経済的、心理的環境のせいです。

ボケの方は「恍惚」と云うよい言葉がついたが、性格の方もなたかよい名をつけてくれるといいですね。

「かわいいおヨメさん」

の行く末？

女の人は、年をとってからと言うより、それ以前に問題がありますね。

女性の生き方、家庭生活などが問題を含んでいる。

結婚して、自分の子供や主人にはかりエネルギーを向けている時はよいが、子供に手がかからなくなり、夫も社会生活が忙しくなる頃から生活がだんだん空しくなってくる。

さらに、子供が離れ、夫も失ってしまった時（おじいさんより五・一九年生きする「厚生省発表昭和五十年簡易生命表」味気なさとか、悲しさばかりになる。

何かに頼って生きて行く姿勢。

子どもによって、夫によって自分の生きがいを感じる姿勢が問題ですね。

教育ママも、そうですね、離れてみると、自分自身は何も無い。

若い時からの日本の女性の非常に依存的な生き方と、おばあさんになってからのゆがんだ性格とは大変に関係がありますね。

日本のおばあさんの自殺率は世界一と言いますが、これもこの依存的な生き方が原因の一つじゃないでしょうか。

もう一つ、日本のおばあさんは社会的関心や友だちがたいへん少ないこと。

狭い範囲のものにしか関心を持たず、その範囲に存在していた子供が去り、夫が去って行ってしまうと、あとはただ自分への関心ばかりが強くなる。

「あんなに子供のとき世話をしやったのに」などと、いつも受身で、自分への愛情とかケア

ばかり他に要求するようになる。
または、体の調子に異常な関心をもって過度に自己観察をしたりする。

年よりの体は探せば十や二十の病気を見つけたことは簡単です。

しかし、それを治さなければ不健康かと云うとそんなことはないのですよ。

脈が多いとか血圧が上がるとか、ごくありふれたことを異常に不安に思うことが不健康です。

こうなると毎日の生活が苦しく、食欲や睡眠も悪くなるので、心ばかりか本当に体の調子が悪くなります。

人間として

そうでなくとも、体力は衰え、疲れやすく億劫になり、自分の知識とか興味の範囲も限られてきて孤独になる。

偉い人には、孤独もまたよいのですが、多くの人は孤独になると精神的に不健康になります。

体力に応じて、出来るだけのことをする雰囲気とか姿勢をもつこと、小さな範囲でもよいですから、自分から進んで人と交り、何にでも参加する気持が必要ですね。

また年寄りには、若い者に同調しなければいけないとか、同調してもらわねばならないと考えるのは、間違いですね。

人との協調は必要ですが、それは年寄りだから

ではなく、人間としてみんなに必要なこと。

意見の違いや感覚の相違はあるのが当たり前で、老人だから、若い者だからではなく、人にはそれぞれの考えがあるのですから、たとえば、子どもなり孫なりが耳を傾けなくても、賛同しなくとも、自分の考えは考えとして話す態度がもっと年寄りにあってよい。

日本のおばあさんには、とくにこれが足りない。

同じ楽しみでも、ただボンヤリとテレビや新聞を眺めているのではなく、関心のあることについて、大いに人と議論したり考えたりする。

「わたしはこう思うけど、あなたはこう思うかねえ……」

と積極的に出張する態度が望ましい。

物事に対する関心を失って、頭を使わなければ使わないほど早くボケます。

六十才をこえると、まわりが老人扱いをはじめ、本人もその気になり年寄りじみた言動や服装をして年寄りらしくするうちに年寄りくさくなる。人間年をとらないでいることはできないけど、年寄り臭くならないうことはできる。世間の固定観念にしばられて老い込んでゆくほど愚かなことはないでしょう。

世間体にとらわれることなく、もっと世間に向って社会に向って、また未来に向って、どしどし発言し、わたかまりなく生きるように努力することが大切ですね。

老いるということ

新宿区

伴野正枝



ひとりごと

当年とって七十五才と八ヶ月。私の体はいま盛んに収縮作用を行なっているが、私はそれにゆっくりと抵抗しつつ暮らしている。いそいで雨戸を閉めながらあわてて自分の顔をパチンと雨戸と雨戸の間に挟んでしまい、顔の側面に青あざをつくった人がいたが、私はそれほど呆けてはいないつもりではあるけれど、それでも老衰も後期に入っていることを認めざるを得ない状態で、しくじりをする度に桑原桑原、わがもうろくもいよいよ恍惚の一步手前になったかと、友達に会えばお互に自分の失敗を話しあって声をあげて笑い合うが、家庭にあっては老人の失敗に対しては寛大であってほしいと思う。失敗や云い間違いをいちいち指摘されると、老人はだんだんに萎縮し、生きる意欲を失ってくる。

老衰にもいくつかの段階があり、個人差もあるが、多くは眼から始まり、老眼鏡が二度三度かわる頃には、耳が遠くなり出し、同時につまり易くなり平衡感覚に狂いを生じて、思いがけない怪我をするようになる。二つの仕事を同時にする事も出来なくなる。必ず一方が留守になって、鍋をこげつかせてしま

うなどの失敗をする。

背負う力があっても抱える力がなくなり、従って孫の世話はおばあさんの役などと老女に押しつけるのは危険である。

日常の生活の中で、軽いものを十度持ち運びするより、重いものを一度運ぶ方が老人の体にはこたえる。こたえるということとは老人に無情を感じさせることもある。

例えばゴミの収集場に、大きいポリバケツを運ぶことなどもその一例で、老若同居のわが家の近所では老人の役になっていることが多い。

— そんな重いものをお持ちになるのはご無理じゃないですか？ と云えば、

— 私がバカだから……バカバカバカです。と叫ぶように云った老人がいた。非難はお嫁さんに向けられていた。

若い人は老人になった経験がない故、老人の気持がわからないのも無理がないが、肉体的にも精神的にも、抵抗力を失った老人は、非常に感じ易く、泪もろくなっている、若者から見れば、なんでもない、つまらないことに喜んだり、悲しんだり、索漠とした気持になったりするものだ。たとえ肚の中では老人

を一つの道具としてしか見ていなくても、老人と若い人たちが同居しているような場合に、「ただいま」とか、「行って参ります」とか、昔は常識になっていた言葉の一つで、たわいなく老人は幸せな気分になれるものである。

幸せについて

かつて、食べることに困らなかったら、善意のある人々に囲まれて暮すことが老人の一番の幸せではないだろうか、と思つたことがある。その上その人達が自分とおなじような考え方や、日常生活の上における出来ごとに対して同じ感じ方をしてゐる場合に、私は尚一そうの幸せを感じていた。そうした人達との間には誤解がなかったから、いつものびと自分をさらけ出して話せた。

たとえ五分間の立話であっても、こうした人との会話はたのしい。人間関係に於いて、自分を押えながら毎日を過すということとは、老人にとって相当に苦痛である。

私に右のような愉しさを味わせてくれたのは、かつておなじ地所内に住んでいた人々である。もっとも私は大家の立場にあったし、一番の年長者であつたから、その方達が私に多少の遠慮をして、私だけがいい気分になっていたのかも知れないけれど。

ものの解釈はその人の性格や受けた教育、育つた時の環境などによってさまざまに違つていくものではないだろうか。だがお互がより楽しく生きるためには、自分の身にふりかかる火の粉は払わねばならないが、それ以外の自分には関係のない事柄に関しては、無関心である方がよい。たのしい生活が出来ると思

う。幸せは、ひとが与えてくれるものではなく、自分がつくつてゆくものだと思つてゐる。

世には自分には責任のない大きな不幸に襲われることがある。年月が傷をいやしてくる以外にいやしうがないものだが、それ以外の小さな不幸はたいていの場合、自分自身に責任があるように思う。少なくとも私の場合は、皆自分の到らなさからおきてゐる。

ところが最近になって、私の考えはちがつて来た。本当の幸せとは、みんなが、日本中の人、世界中の人が幸せにならなければ、なれっこがない。だがこうした幸せは、夢、まぼろしの願ひであつて、百年待つても、二百年待つても、人々の上に巡つて来ないだろう。

人間に欲ばり根性が存在している限り、人々の上に本当の幸せなど、めぐつて来ないだろう。絶え間なくおこる人災や天災、人間性を失つた人々の行動におびやかされている現代、悲惨な出来事が報道される度に、今日はひとの身、明日はわが身、いつな時、自分の上にもあのような不幸が襲つて来るかわからないという不安が、知らず知らずのうちに個人の小さな幸せを求め、心をかえていったものだろう。

せめて自分は一隅をてらす一粒の麦になりたいものだと思ひながら、生来、未熟に生まれついた私には、なにもできない。私に出来ることは、自分に経験のないことは一切口出ししないこと。望まれぬ意見をしないこと、批判をしないこと、不幸な友達のぐちを黙つてきいてあげる、——ぐちは女の健康法の一つだと思つてゐるから——ぐちなのである。(投稿)

老人と性

田中喜美子

——あなた自身の歪みがここに反映している——



老人がみな「若い」てはいない

老人のあつまりは気が滅入る、と思いこんでいる人が、この例会に出席したら、さだめし驚くことだろう。

夏の陽にきらめく海と、海沿いの街なみの上をうねってのびている高速道路を見晴らす、十二階のひろびろとした室が、明るく近代的なせいばかりではない。

何よりもまず、出席者があかるいのだ。

男性の大半は、こざっぱりと、白いシャツ。

ところどころ、折り目の立った浴衣すがたがまじる。ふさふさした白髪、まだ黒い髪の人、痩せた人、肥った人といろいろだが、みな、健康そうである。

その間に、多い髪をアップに結いあげ、白地の小紋を優雅に着こなした女性。ごましおの髪をショートカットに、ワンピースのえりもとに

薄色のスカートをあしらった、はっきりした二重まぶたの、モダンなひと……。

若い者のあつまりとはちがい、どの人もあまり固くならず、顔見知り同士で話しあって、くつろいだ雰囲気の流れている。

それでもやはり、女同士はかたまりがちで、始めから終りまで、離れない二人づれもいれば、女ばかりが二、三人、居並んでいる片隅もある。その間を縫って、身ごなしも軽く、お茶菓子をサーブして歩くテキパキしたひと。

どこにでもある風景である。

もちろん、出席者のほとんどが、生活に困らない、肉体的にも故障の少ない人たちであることが、この明るさの原因であるには違いない。しかしそれだけでなく、それは年齢にこだわらず、異性を求める心を持ち続けている人、そしてそれを行動に移している人々の発散する、より積極的なあかるさ、豊かさであるように思われた。

二十七年前、老歌人川田順氏の恋が、ジャーナリズムに呼びおこした異常なセンセーションは、当時老人の性が、どれほど抑圧的な扱いを受けていたかをあらわしている。そしてこの状況は、フリーセックスが語られ、未婚の母が出現しはじめた今日もなお、変化していない。

老人は性を超越した存在と考える常識は、はたして正しいのだろうか。

性愛は、若者の特権であり、青春の独占物なのだろうか。

老年の性の実態を学ぶために、神奈川県立老人福祉センターの「茶のみ友だち相談室」が毎月開く、高年者の集団見合とも云うべき「若潮会」の席に列なってみた。

見合いに出てくる人々は、ほぼ三種類に分れるという。

はつきり配偶者を求めている人。同棲も含めて、ステディな恋人のほしい人。何となく、異性の友人を求めている人。

五十一年六月現在、登録者の数は男七十四人、女五十七人。年齢は六十才以上であるが、六十才を過ぎるとその比率が逆転しているのが目立つ。六十五才にもなると……と年齢にこだわるのは、やはり女性がつねに、選ばれる立場にあるからだろう。

登録者のうち、同棲を含んで結婚に到達した人、七組。ステディな関係にある人、三十四組となっている。

同棲を積極的に肯定している、自治体のさばけたサービスぶりにも驚かされるが、結婚の相手、同棲の相手の世話をして、あとで当人の息子や嫁にどなりこまれた例もただけに、家族の了解が、参加者の条件の一つになっている。

キーセン観光ならいざ知らず、旅行でも、音楽会でも、展覧会でも、日本では女の数が多いのが普通だが、この日の出席者三十四、五名のうち女性が十名をこそこのアンバランスが注意をひいた。

年をとっても異性を求めるのは、やはり男性に多いのか。女性は、男性なんか、結婚なんかこりこり、と思っているのではなからうか。

六十才をすぎて配偶者のない率は、女性のほうが圧倒的に多いのだから、私をとらえたのは、まずこの疑問である。

知られていない「老人の性」

ところで、高年になってなお、配偶者を、恋人を求めるひとびとは、ふつうの人とは違う若さの持主なのだろうか。

平たく云って、性的に、人並すぐれた能力の持主なのだろうか。

それとも独りぐらしの淋しさから、そんなこととは関係なく、身辺に異性の友を求めているに過ぎないのか。

老人の性についての科学的なデータは外国にも数少ないが、ことに我が国では皆無に近く、わずかに中野保健所の大工原秀子さんが、偏見の強い人々に「色きちがい」呼ばわりをされながら、官僚機構の壁をのりこえて、昭和四十八年独力でやりとげた調査が、ほとんど唯一の基礎的な資料となっている。

六十才以上の男性二六一名、女性二四九名を対象に大工原さんが実施したアンケートの結果は、高年者の性生活という未知の分野に、一筋の光を投げかけている。

まず対象となった人々の年齢をみると、六十才―六十四才の人々は一〇％前後に過ぎず、主として六十五才―七十九才の人々が全体の四分

の三を占め、かなりの高年者を対象としていることがはっきりする。

こうした年齢構成にもかかわらず、男性の五二％に性行為が可能である。性的欲望は更に上まわって、五五％の人が持ちつづけており、異性とのかの精神的交際のみを求める人は僅か一三％。文字通りの「茶飲み友たち」を求めている人は少数派なのだ。

女性ではどうだろう。残念なことに調査対象の女性のうち七四％がすでに未亡人になっている。

男性の有配偶者率とはほぼ反比例しているこの数字を見ると、男がほとんどつねに女より年長である現在の結婚のかたちが、本当に合理的なものかどうか、つくづく考え直したくなるのである。

女性の場合、性行為を欲している人は一二・五％と男性をはるかに下まわり、一方精神的交際を求める人は約二五％と、男性のほぼ二倍にのぼっている。

性に関する調査というデリケートな分野、しかも性がタブー視されていた時代に育ち、「貞女二夫にまみえず」式の教育を受けた女性を対象とするとき、この種のアンケートに現れる数字はどの程度信頼できるものなのだろうか。

性的欲求はまったくない、と答えている女性のうち、「同性の友だちがいればそれでいいの

だ」とか、「面倒くさいから」と答えた人のゼスチャーの大きかったことが印象に残ったという大工原さんの洞察の鋭さは、老女の「抑圧された性」のかなしきを指摘する。

「男はほしいと思わない。きらい。性的欲求はなくなった」と書きながら「本当は話のわかる異性とおつきあいたい、それは経済的理由と世間体がわるいので、ためだろう」と矛盾した言葉を続ける六十六才の女性の回答は、世間体と本音の間で揺れうごく女心を描き出して典型的である。大工原さんのいうように、女性の「社会的な抑圧を解いてやらねば」性に関する本音をとらえることはできないのだろうか。

老人の「性」の現実

「茶のみ友達相談室」での取材のとき、疑問に思ったことの一つに、登録している男女の、学歴差がある。

男性は、ほとんどが尋常小学校か高等小学校卒。まれに高専卒がまじる程度であるのに、女性には高等女学校卒が珍しくない。

——教育程度の高い女性ほど、自己主張がはっきりしている。世間体とか、いい年をして、などという月並な考えで家の中に閉じこもってしまわずに、相談室へやってくるができるんです。

相談員の一人、老年社会科学の専門家でもあ

る吉沢勲さんの分析は、明快である。

この相談室の登録者に対する調査は、時には一人四十回にもものばる面接で得た最終的な結論を相談員が纏めたものだけに、人数は少なくとも、より密度の高いものといえることができる。

女性五十五人、男性九十三人を対象とした調査の数字は、次のようなものである。

六十／八十才までの女性のうち、性的欲望のある人、約九三％。男性で、約八六％。

行為の可能な女性、約八〇％。男性、約六二％。時に可能、それぞれ約一％と一八％。この数字は男女の生理的構造の差から、自然なものと受けとれるが、欲望に関する数値は、いささかの驚きをさそう。

——この女のひとたち、ほとんどはじめは性的欲望皆無、と云っていたひとたちですがね。

と吉沢さんは笑う。

しかし女性の場合、一性性的欲望とは具体的に何をもってはおかるのか。男性ジャーナリズムの煽りたてる、卑俗な好奇の眼が、これらのデータを含めてはならないであろう。

——女性が相談にみえてまず口にするのが、

この年になって今さら、とか、よい年をしてお恥しい、という言葉。そういう意識のあるうちは、アンケートを取ってみても、本音は出ない。だからこの数字は、その人が異性と交際していく上で、文字通りの茶のみ友だちを求めているのか、それとも、本当に気に入った相手なら

ば、肉体関係を持つことも厭わないのか、という点を把握した上で出した結論です。交際の追跡調査で、男女双方から相談を持ちかけられますから、欲望ゼロ、と最初答えていた人の、実態も掴めますしね。

吉沢さんの言に従えば、性的欲望なる言葉の内容は、単に即物的なものではない。それは、肉体も、精神をも含めて、全的に異性を愛し、受け入れる欲求と能力を表わしていると云えよう。

相談室の窓口を受けもつ大坂八重子さんは云う。

——ある女性が、交際していた男性の家へこないか、と誘われたというんですね。子どもさんと同居のお宅なので、ついて行った。そうしたら、セックスを迫られたということで、憤って報告にこられたんです。私もその当時は、相談員になりたてだったので、ショックでしたねえ……ところがいろいろ見てみると、それではその女性に欲望がないか、というと間違いないです。相手次第、情況次第なんですね。その辺をつきつめると、女性に欲望がないと云ったらウソになります。これは当然のことですし、ほんとうにすばらしいことだと思えますよ。いくつになっても異性を求める気持を持ちつづけていくことは……。

大工原さんの言葉を私は思い出す。
「不思議なもので、どんな、死にそうな寝た

きり老人でも、この話になると、いやな顔をする人はいないのね。『おばあちゃん、そんな弱気なこと云ってないで、元氣出して、いい人でも見つけなさいヨ』っていうとね、誰でも『そんなこと……』と口では云いながら、ニコッと可愛い顔して笑いますよ」

偏見と抑圧とのなかで

生のあるかぎり、人は愛する。
そしてすべての愛の根源をなすものは、性である。性の力によって、人は自我の牢獄を脱け出し、はじめて真に他者を見出すことができる。万葉の昔から、何世紀もの間、この国でも恋愛はすべての風雅の源にあった。
しかし。

戦国を通り、江戸を過ぎ、明治を下るあいだに、性は歪められ、卑められ、蔑まれるものになり果てていった。

性を、生殖と快楽とに分割し、妻と娼婦をその道具に仕立て上げた結果、一三九号の和田好子氏の「サムライ・日本の夫」に見るように、「色好み」という言葉は、風流に結びつくどころか、妻はおろか、恋人にさえ結びつかない低次元の「遊び」のイメージと結合してしまい、「色」を語ることはいやらしいことになってしまったのである。

性の解放が語られる現代の日本においてもな

お、この観念は生きている。否、「性の解放」自身、薄汚れたままの「性」の、さらに頹廢した他のかたちにすぎない場合が多い。

汚され、歪められてなお、愛を生み出す根源的な力として、老いた人々の中にも、若者におけると同じく、脈々と生きつづける性。

しかし老人の性はいま無惨な扱いを受けている。

「父は現在四十九才。母は四十五才です。家庭内では子どもの前で決して仲のよさそうな面はみせません。ところが私たちの目の届かないところになると……あたかも若夫婦のように陰でコソコソ自分たちの欲望に任せているのです。人に見られたら絶対絶命のような行為をしているなどと、どうして許せるものでしょうか」

これは日本性教育協会理事の間宮武氏にあてられた高校生の手紙の一節である。(注1)

両親が性行為を行なうことに對しての病的な嫌悪、それは若さの無知と潔癖からばかりくるものではない。ここにはすでに「子供の前では決して仲のよさそうな面をみせません」という、日常生活の中で「色」を拒否し、追放している夫婦のありかたが、逆に、それだけが独立した「性行為」のグロテスクさを浮き立たせ、歪んだ「性」の観念を、こどもに植えつけてしまった悲劇が見てとられる。

そして人々が、高年者の性について持つイメ

ージも、この高校生と大差はない。性のすがたが薄汚れたものであればあるだけ、ひとは人生の終りに近づいた両親が、その汚れから超越した存在であってほしいという願望を抱く。

「自分のこどもなんかも、いい年をしてお父さんいやらしいなどと云うし、何というか老人のこういうことを、やっぱり変な目で見ていますね。……自分の実感として身体にわるい所は一つもないし、としよりの感じはしないのに、こどもたちがおじいちゃんおじいちゃん、寄ってたかって老けさせてしまふんですよ」と六十五才の斎藤千代蔵さんは憤っている。(注2)

しかし子どもたちが両親の結婚を喜ばないのは、両親の「脱煩惱」への期待ばかりからではない。

「六十二才で息子を中心に農業を営んでいます。妻は三年前、亡くなりました。……独り身の淋しさから、同年輩の女性と交際をはじめ、現在同棲して家事の面倒を頼んでいます。ところが子どもたちは、『いままら再婚すれば世間体がわるいし、別れる時に財産を持っていかれる……』と云います……独り身の老人にはよく配偶者を得ることこそ最上の喜びだと私は考えています……しかし子どもたちは、こんな私の気持ちを一向に理解しようとしてくれません」

これは昭和四十九年三月サンケイ新聞に掲載された人生相談の一節であるが、老親の再婚話

に示すこともたちの反応は、残念ながらこの種のものも少なくない。

——となりこんでくるのは、その家のお嫁さんの、中年の主婦が多いですね。ま、息子も結構わがりの悪いのが多いが……と吉沢さん。

これが「茶のみ友だち相談室」が、結婚に固執せず、同棲または恋愛の相手を世話する一つの原因でもある。妊娠、出産という副産物を伴わない老年の性が、同棲を容易にすることは理解できるが、それが「財産を持って行かれる」という子どもたちの利己的な反対を和らげるための実際的な手段として使われていることも否定できない。こどもたちの利己主義の酷薄さに肌寒さと、憤りを覚えるのは私だけだろうか。

老人を疎外する“差別”

一体、物質と金銭に対する執着は、欧米人の方が日本人よりはるかにつよい。老人の恋愛や結婚を妨げる大きな要素に、遺産相続をめぐる子どもたちの確執があるとすれば、欧米でも老人の結婚は、わが国以上に困難なはずである。

欧米諸国と日本との老婚率を比較してみよう。

一九七一年の調査で、六十才以上の高年者の婚姻率を比較してみると、米国はわが国の、男は九倍、女は二十九倍。フランス、男九倍、女十六倍。スウェーデン、男三倍、女九倍。イタリ

ー、男三倍、女六倍。

老人の性が、ことに女性の場合、わが国でどれほどタブー視され、抑圧されているかを、この数字ははっきりと示している。

ここでもう一度考えてみたい。

私たちは本当に老人には性は不必要、と信じているのだろうか。

漁色家として有名な、伊藤博文や、波沢栄一、さらに妾の数を誇っていた三木武吉などのことを考えてみよう。

大？政治家や、財界の大立者が、老齢になっても妾をかこい、花柳の巷で女を漁ることを、私たちは別に不思議と思っていない。あり得ること、むしろ、当然なことぐらいに思っているのだ。

「ヒヒオヤジ」などという言葉の存在が示しているように、老年の人々の中にも性が存在し、活動していることを、私たちは心の奥底で実はよくわきまえているのである。

この人たちの欲望を是認し、自分たちの周辺にいる「ふつう」の老人の欲望を否定するのは何故だろうか。

吉沢勲さんは、多くの人が、老人の恋愛について「はほえましい」と批評することに、疑問を投げかけている(注③)が、この事実はまことに示唆に富んでいる。

青年の恋、壮年の恋を、「はほえましい」と呼ぶ人は、いない。

この表現は、自分の力に及ばないもの、不釣合なものにむかって努力する弱者の姿を前にして、使われる。五才の幼児が、母親の手助けをしようとする懸命になっていけば、その姿は「はほえましい」のだ。

老人を弱者としてとらえ、それ故にその性愛を、ふさわしからぬものとして扱っている意識が、一見人情的な装いをまとったこの言葉の背後に潜んでいる。そしてそれは、裏返しにすれば、老人の性愛を禁じ、迫害する意識そのものではないだろうか。

強い者には、すべてが許される。英雄が色を好むのは、讃美の対象とさえされる。

逆に、弱者は、性を楽しむことさえ禁じられる。人々は、老人が再婚を思い立てば、「いい年をして」と白い眼を向け、老女が恋人を得れば、「色キチガイ」と罵るのである。

とくに、もう現役の社会人として働いていないオジイチャンが、異性を愛するなどということは、とんでもないことなのだ。いわんや「未亡人」であるに過ぎぬオバアチャンにおいておや。

老人の再婚や同棲に、最もはげしい抗議をぶつけるのは、中年の嫁さんだという事実は、この推理を裏つける。なぜなら日本の家庭で、老人について、最も不自由な、抑圧された生活を

送っているのは、やはりこの人々であり、抑圧された人ほど、そのはけ口を他の人を抑圧すること求めるからなのだ。

日本社会の特徴の一つである、弱者に対する非人間的な差別が、ここにも存在している。

老人だけの問題ではない

こうしたすべての偏見、すべての抑圧をのりこえて、「茶のみ友達相談室」に現れる人々はことに女性は、それだけでもう、解放された人々といっても、云いすぎではないだろう。

夫に死別して二十年、成人した娘から「お母さん、いい人を見つけないさいよ」と勧められて相談室にやってきた人。八年前、夫を失い、その後交際した男性も痛で失い、淋しさにたえかねて、新たな愛を求めているひと。五人の子どもも成人し、悠々自適の生活をという矢先、妻に先立たれて孤独をかこっている男性。

大阪さんによると、仲のよかった配偶者と死別した人ほど、淋しさに堪えかねてか、熱に浮かされたように相談室にかけこむことが多いとか。

きれいで、快活な女性がもてるのかと思うと、——どうもそうでもないんですね。大人しい人のほうが、取つきやすいみたいで……という答え。これは日本男子の一般的心理らしい。

——交際していて、いちばんいやなのは、す

ぐにこちらの収入や、財産のことを聞きたがる女性です。

これは相談室で、相愛の間柄になった女性と、こどもたちにも祝福されて同棲し、「毎日が幸せ」という七十才のTさんである。

最後に、気になっていた女性の出席率のわるさについて、問いかけてみた。この現象の解釈をめぐって、男女の意見のくいちがいは、象徴的である。

前述のTさんは云う。

「やはり、オバアチャンは出にくいんでしょ。うな。孫の世話もあるし、家族にも気をつかうし……男は来たいと思えば、勝手に出てくるから」

「そんなことじゃありません」とはつきりした明るい顔立ちの、Sさんは断言する。

「一口に云うと、幻滅して出てこなくなるんです。ともかく男のかた、女とつきあうのが下手。お茶をついであけても、『やあ有難う』と云えばいい方で、ヌツと茶碗を出してそれっきり。個人的におつきあいをすれば、すぐに『旅行しないか』『家へこないか』です。」

私だって、別にそういうこと否定してるわけじゃありません。でも、そういう気分になるのには、時間がかります。あんまり露骨で、気が短いかたが多くて、うんざりしてしまいます。一口に云って、みなさん、口説くのが下手。

何とか、気持よくおつきあい出来るかためぐりあえないか、と思っています。もっともその時、はたして自分の体が使いものになるかなと心配にもなりますけれど……」

「熱烈な恋がしたい」というSさんは、三年前から若潮会に顔を出しているが、今日はいじめて自分のほうから申込みたいと思う男性をみつけたと云う。ところがかたわらにいた女性も、同じ男性に目をつけていたことがわかり、「あら、同じ人だ！ どうしましょう！」と屈托のない笑い声があがった。二人とも、まるで女生のような若々しさである。

いったい私たちは、なぜ、そしていつから、老人に性愛は不必要などと思いきんてしまったのであろうか。

老いない心は、生のある限り、愛を求める。

しかしこの国で、性愛は長く抑圧され、ひずんだ形のまま、生き続けてきた。

偏見と、抑圧をのりこえて相談室に出かけてくる人々でさえ、そのひずみから完全に解放はされていない。愛を求めながら、我が手で愛を疎外する、この国のかない現実がここにも存在している。

それは、老いた人々だけの現実でなく、私たちすべての現実なのである。

(注1・2・3・「老人と性」)

日常出版、それぞれ75頁、198頁、203頁)

第一回 わいふ 合評会

一四一号を基に、編集方針や具体的な記事の内容など、東京近郊の会員の方にお集まりいただいて、合評会を開きました。

今後機会を作って行いますので出席ご希望の方はお申し越し下さい。

論争しましょう

K―おしゃべり欄、私のひとこと欄へ編集者が同じレベルで返事を書くのはどうかしら。

話がそこで途切れて会員相互の話し合いが無くなるのじゃないか、むしろその欄への投稿は会員全体への呼びかけ投稿とみるべきじゃないかと思えますけど。

M―でも読者の投稿に丁寧な返事が出るの、とてもいいと思えますね、うれしいわよ。

N―編集者が不必要に低姿勢だって感じるんだけれど……同じ立場で口をきいてもいいのに。編―でも実際に投稿をいたくと、本当に有難く感じてしまうんですよ。

N―号を追うごとに編集者の意図がはっきり出てきて、別の意見の人が書きにくくなるのじゃないかしら。

T―私は「何を追求するか」という「わいふ」らしい本筋がもっとバンと出てほしいと思う。みんながそれを中心にワイワイ話し合えたらと思うけど。確かに読んでみると「家の中にばかり閉じこもっちゃダメよ」という声が微妙に聞こえてくるんだけど、もっと強く主張してほしい。

N―アラ、私は反対に、企画も依頼原稿も全て編集者の主旨がビンビン伝わってくるわ。それも全部文章の立つ人はかりでしょ。ちょっと反論できなくて。

編―一四一号の特集はどれもこれも「夫よ家庭に帰れ」みたいになっちゃったけど、これなど全く偶然の一致なんですよ。でも、これだけ出ているかということね。ただ、これだけ出ているかという状況がどれだけかはびこっずアップされたんじゃないかと困るの。男性が家庭に帰れば全て問題は解決されるか、というところ決まってしまうんですよ。『マイホーム』主義を鼓吹していると思われては困るのよ。N―そうですね、女性がもっと社会的に生きるようにならないければ……。

それから、企画部分の内容が今までの市販の雑誌と大してかわらないんじゃないかという気がするんです。私はもっと生活の中から出てく

る生の声が聞きたかったんだけど……。

M―特集に対する意見を募集したらどうかしら。ひとこと欄じゃ短かくてね。そういう欄を確保しておけば皆さん書くのじゃないかしら。

編―そう思ってた一四二号からティーチンを企画したんです。というの誌上論争が全然ないからなの。例えばこれは話題になって反響がドツと来るなっていう投稿が載るでしょ。手ぐすね引いて待っているのに何も来ない。でも個々に伺うと、「私は何か書こうと思ったのよ」とか「誰か書いてくれると思った」とか云う人はいくらでも、その誰かに、誰もなってくれないの。

I―都会的というか、何かがあっても「こんな人もいるんだな」位で済んでしまうんですね。全員がカッとするような問題提起を誰かが書いてくれないかと思っているんだけど……。

M―例えば結婚にしても四、五十代の人と、もっと若い親や娘たちの考えは全く違っているでしょうね。ひとつのテーマで年代の差による論争みたいなものが出たら面白いと思うけど。

T―今出ている家庭科必修のことも、私の体験と友人の体験じゃ、家庭科に対する考えは全く違うの。そんなことから考えても、もっとテーマを細かく、ちいさくして募集すると反応がちがってくるのじゃないかしら。

年代を超えた話し合いの場に

編―対象年令ですけど、初めは子育てが済んだ三十代半ば過ぎを考えたいんですが。

K―比較する必要はないけれど、昔の「わいふ」(大阪編集時代)には、子育て最中の女の生なましい迫力があつたみたい。今の「わいふ」は、

高年齢になつての余裕が出たみたいな感じ。T―今の二十代子育て盛りの私たちは、「私は私」みたいな考え方があり一方で、とても孤独

ですね。市販のヤングミセス向の雑誌をみても「文通を希望する」人たちがとても多い。でも

「わいふ」はちょっとむづかしい、というかとても読むヒマはない、と友だちには良く云われてしまつて。

編―ところが新聞に「わいふ」が紹介されると、意外に若いお母さんから反応があつたんですよ。

B―三十代、四十代は子どもが離れて真剣に何かをみつけたがつている人が多いでしょ。仕事

も手にないし、子どもも離れる、欲求不満のこの年代も何かを「わいふ」に求めているでしょうし。

E―年代によって求めていることが違つていますね。でも、私たち普段の生活ではとても年代

の違う人たちとお友達になれないし、話し合うことすらないでしょう。だから、「わいふ」は

年代の違う人達と対等の立場で話し合えるという場

でいいんじゃないかしら。

実感とゆとりとのバランス

編―具体的に内容はどうでしょうか。

N―立派すぎる意見が多すぎて、さっきも云いましたけど、もっとドロドロしたものがあるてもいいんじゃないかしら。

M―でも実感が出ている投稿が多いですよ。特に「子どもがほしいと思う時」なんか、ウ

ーンと唸りたい位実感があつた。この「わいふ」は市販のどの本よりも共感が持てる気がする。

E―西田さんの「海と少年と娘」一筆力があつて感心するけれど、こんな場合、女には人を助け

ようという気が起きないものかしら、と思つたわ。弱い女、保護される女、として扱われてい

るうちに、そういう姿勢が身についてしまうのではないかしら。そのへん考えてみたらという

気がするんだけど……。

N―「やさしさときびしさ」イギリスはこんなにいい、と云われても、受け入れる気がしない

わね。かえって日本のほうがいいところありますよ、っていいにくくなっちゃう。

M―イギリスがいい、とは云っていないんじゃないの? あちらではこうだ、と云つてるだけ

で……ただ、夫が家庭にいて、ということも、そこだけ取り入れるわけにいかないでしょう?

いろんな社会的、歴史的條件があつて、それが可能になるわけね。子どもの躰だって同じこと

だと思うの。その意味で私は面白かった。

N―投稿者の解説が欲しいわ。一番知りたいのは、専業主婦か有職か。それでよいぶん立場が違つてくるんですよ。

A―年齢を知りたい人もいますね。原稿によっては年齢を知つて、はじめて理解できることもあるし。

M―原稿によっては、とか依頼原稿に限つてとかの方がいいわね。どの投稿も年齢、職業がベ

チャツと並ぶのはどうかな……。

N―「あなたのしつけはそれでよいのか」、は反撥を感じましたね、押しつけがましいという

か。というのは「わいふ」はそういう本だと思つていないから。何かバカにされたみたいで。

E―これは要するにデータの分析なんですね。私はなるほどな?と思う点が随分あつたけど……。

M―SFは面白いわ。女性の描く未来の女性というのは今までなかったもの。

N―ただ私が思うのは「わいふ」誌全体に遊びの精神が欠けていると思うの。SFにしてもイ

ギリスの話も旅行の話でも全部「女」から一歩も出ていないでしょう。繰り返し「主婦」の立

場で、夫、子ども、家事から脱出できない。もっと別の立場で自分をみつめることができて

いいんじゃないかしら。

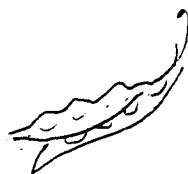
編―生活実感と遊びの精神、両方を、限られた五十頁の中にどんなふうに取り入れていくか。

実にむずかしい……: 会員の方がどんどん具体案を出して積極的に編集に参加してくれたら、と

思いますね。

ベランダ園芸を 始める人のために

和田直久



ベランダで

鉢作りはよしでしょう

昭和四十年の春、棟割長屋のような社宅を脱出して、目出たく団地園芸を楽しむことが出来るようになりました。所がその結果は？二十年の園芸歴を誇る(?) 私にしては芳しい結果ではなかったようです。

今反省して見ると、土の上での園芸経験は、必ずしもコンクリートの上には役立たないということです。

極論を言えば、団地のベランダの上は、砂漠の上に似ています。このような所で植物を栽培するためには、何よりも水の問題をどう扱うかが一番のポイントでしょう。

私は素人の人には、ベランダで鉢作りをすることをすすめません。

鉢植の花を賣って植物を鉢から抜いてみましょう。鉢の中は白い根で一杯です。もし水がきれると、植物はたちまち枯れてしまいます。鉢作りのベテランは暑い盛りには一日二回ずつ水をやります。このようなことを欠かさず続けられる人でない限り鉢作りで好結果は得られません。鉢のもう一つの欠点は、高価なわりにこわれやすいことです。

ベランダは決して植物のためだけのものではありません。洗濯物を取りこむ時に下駄で鉢を割ってしまう。このような失敗をさけるために

も、鉢作りはよしの方がよいのです。

私が愛用したのは木の箱でした。その他にポリバケツとか、最近魚屋さんが使っている白い発泡スチロールのポリトロと言う箱もよいでしょう。園芸用にプラスチックの箱をプランターという名で売り出していますが、最近は一バーゲンなどもあり、割安で手に入ります。

このような容器の長所は、丈夫な上に大きなものであれば週に一回十分に水をやればすむ点です。水やりで重要なことは水をやる時間です。一般には朝か夕方。冬は日中がよいでしょう。絶対にさけるべきなのは、夏の日中、冬の夕方です。共に植物に障害がおきやすいようです。

どのように栽培するか

プランターを除き他の容器を使う場合、まず最初に箱の底に穴を数個開ける必要があります。こうしないと箱の底に水が溜まり、一部の植物が根腐れを起す可能性があります。底の方に出るだけ粗い土を入れるのも、同じ理由からです。その上に入れる土も、わりと粗い方がよいのです。素人は細かいふるいにかけた土を入れたりしますが、これは大間違いです。植物のよく育つ土とは、一般的には柔かく、その中に沢山空気を含んだような土です。所がこのような状態を鉢や箱で保つことはむずかしく、水やりをくり返すうちに、だんだん固くなってしまい

ます。細かい土ほどその程度が強いのです。

私は箱作りには余り土を使わないで、パーミキュライトというある種の石を焼いて作ったふわふわした粒状の人工砂と、ピートモスを半分ずつ混ぜて栽培を行いました。長所はどんなに水をやっても土のように固くならないこと、軽いので持運びが簡単なこと、それに清潔で病虫害が出にくいことです。欠点は高価なことです。一般の園芸店で買うと小袋が両方とも百円から二百円します。もっとも大袋で買うと非常に割安になるのですが、なかなか一般の園芸店では見かけません。

土のいれ方のコツは、決して箱のふち一杯まで入れず、一センチ余しておくことです。もし土を一杯に入れたとすると、水をやるとすぐ外にこぼれてしまいます。逆に少し空間があれば、リング箱位の大きななら、バケツ一杯位平気で入ります。この程度に水をやれば、週に一回の水やりで十分なはずですが。

なお言うまでもないことですが、できるだけ腐葉土やピートモスを土にまぜましょう。肥料は腐敗して悪臭が出たり、うじがわいたりするおそれのある鶏ふんや油粕などの有機肥料を使わず、化成肥料などの無機肥料を使うのが周りへのエチケットでしょう。化成肥料は各種の名前で売られています。三要素が配合されている点で便利です。だいたい大きな箱ならば、軽く一握り位を月一回施してやれば、殆どの植

物が育ちます。

何を植えるか

ペランダ園芸の本当の楽しみは、日本の土の上では素人に作りにくいぐせに、コンクリートの上では却ってよく出来るメロンや西瓜の栽培かも知れませんが、ここではこれから作れるやさしいものをリストアップしました。

まずさや豌豆です。

これを作るコツは余り肥料をやらぬことです。南向きのペランダなら十月一杯に二十センチおきに二〜三粒ずつ一列に種子をまいておくと、何もしなくても冬を越します。わりと深めの容器（十五センチ以上）を使いましょう。春になってつるが伸びてきたら、ペランダのフェンスにでもひもかなんかで誘引してやりましょう。次にやさしいのは小松菜、春菊、ちしゃ、ホーレン草などの葉っぱ類です。

この類は南向きでなくても、東向きのペランダでも大丈夫です。同じく十月一杯に種子をまけば、冬から春まで楽しめます。箱作りの場合、種子を一面にはらまき、その上にふるいなどで土をかけてやりましょう。

なお、ちしゃやホーレン草の場合、大きじ一杯ぐらいの石灰を種子をまく一週間ばかり前にまいて、土の酸度を中和しておくとういでしょう。

小カブや二十日大根も葉っぱと同様にして作れます。コツは厚くまきすぎないことです。間引きが大変ですから。どれ位の間隔に間引きしなければならぬかの物指しとしては、カブなり二十日大根のりの大きさを考えればよいでしょう。二十日大根なら最低二センチ四方、カブなら五センチ四方位ですか。

花ならば、まずパンジーやデージーの苗を買ってくることです。もうすでに花が咲いていますので色彩設計が簡単です。両方とも盛りにはかなり株が茂るので（特にパンジー）、少くとも十五センチ間隔で植えましょう。関東地方でもペランダなら一般の土の上と違い、冬でも花が咲くはずですが。

チューリップやヒヤシンス、水仙等の球根も十月が植え時です。十センチ四方に一球が標準です。球根の上に球根のたけ分だけ土をかけてやりましょう。なおチューリップを素人の人が鉢植にすると葉だけ茂って花がつかないことがあります。これは冬の間に水を切らしたせいです。その点箱植ならば水やりが簡単ですから、こんな失敗はないでしょう。

種子をまくものではスイートピーが、豌豆と全く同様のやり方で作れます。

いずれにしても、秋から春にかけてのペランダは、日もよくあたり、病害虫もすくないので、初心者でも手がけやすく、好成绩が期待出来ます。

（投稿）

主婦と国民年金

最近、老後に対する関心が高まってきたのか、主婦の国民年金加入者数が急速に増加しているといわれています。

充分でないまでも、老後の生活保障が得られるのは丈夫なことです。そこで主婦の年金について調べてみました。

へ国民年金とは

従来、日本の年金制度はサラリーマンの厚生年金や公務員の共済組合などが中心で、自営業や商農業従事者には縁のないものでしたが、昭和三十四年に国民年金制度が施行されて、二十才以上の人はいずれかの年金制度に加入できるようになり、学生や主婦も希望すれば国民年金に加入することができるようになりました。

六十才までに二十五年間かけ金を納めて、六十才から終身、年金を受取る老令年金の他に障害年金、母子年金、遺児年金、寡婦年金などがあります。

へ主婦の年金加入資格

主婦の場合、国民年金に加入しなかった期間も夫の年金が（結婚年数）も通算されますので、一年以上加入すると年金を受取ることができます。五十九才までの人ならだれでも加入できるわけです。

年金を多く受取りたい人は、付加年金制度と

いうかけ金に四百円上積みする制度がありますので、同時に加入するといでしょう。

年金額は、財産や夫の死後の厚生年金の受給、利子収入などの所得には一切関係なく、かけ金に納めた月数を掛けたもの、例えば、十年間かけ金を納めた人は、

1,400円(かけ金)×10年(120

円)＝168,000円

となり、死ぬまで年額十六万八千円のお金を受取ることになります。元金は一年で帳消しで、長生きすればするだけ得というわけです。

へ物価スライド制

石油ショック以来の急激な物価の高騰は、十年先、二十年先の生活の保障にならないのではないかという不安の声を大きくしました。そこで、消費者物価指数が五%以上変動した場合は年金額に加算する物価スライド制が取り入れられ、今年は四十一・五%加算されています。

二十五年間かけ金を納めて六十五才になったとき

800円(かけ金)×25年＝240,000×1.415

(物価スライド分)＝339,600円

となります。

この年金額の改定に伴って、かけ金の額も当

<p>サラリーマンの妻 〈任意加入せず〉 10年(通算)</p>	<p>国民年金 〈任意加入〉 15年(通算)</p>
--	------------------------------------

＝25年

然調整されるわけで昭和五十一年四月より千四百円に、五十二年四月からは二千二百円になることが決められています。

へ年金制度の問題点

このように物価の上昇に伴って年金額が上がるのは受取る側にはありがたいことですが、かける側への負担が大きくなってきます。近い将来日本は高令化社会になるといわれていますが、老人一人の生活を働く人三人で支えなければならなくなった時、現在の積立方式(二十年先の生活費を積み立てる)が良いかどうか、論議の分かれるところで、ヨーロッパ先進国のように、付加方式(働いている人が老人の生活を見る)に改めるべきだという意見もあります。

日本では、厚生年金や共済組合などがそれぞれ独自の制度をもっていて、転職や退職した場合の継続がむづかしいなどの問題もあり、国民の誰もが安心して加入できる年金制度の確立が望まれます。

へ年金の申込み方法

区役所か出張所へ、印かんごと主人の厚生年金保険証か健康保険証をもって申込みます。

一ヶ月千四百円、付加年金加入の場合は千八百円を三ヶ月毎に納入します。一年以上前納すると割引(複利原価法で5・5%)があります。

銀行など金融機関で自動振替手続きを取っておくと、自動的に振替えてくれますから、忘れっぽい方は利用なるといでしょう。(荒木)

未知の領域

和田好子

ぼくたちの息子、エンライが生まれたのはその年の末であった。冬に入ってからもうらうらと暖かい日が続いて、われわれの楽しい気分にびったりだった。

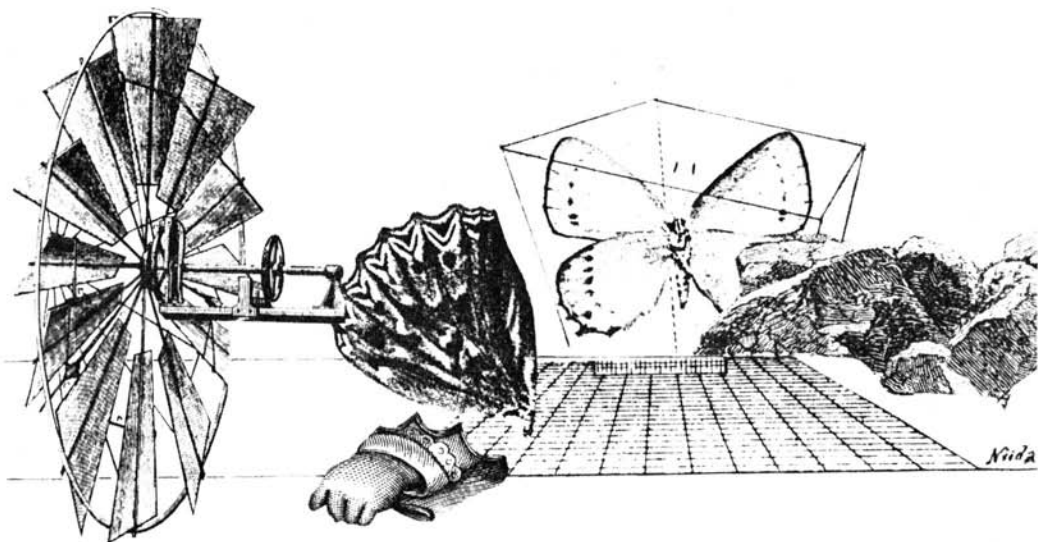
アサコはチャウという自分の姓が、大革命時代の中国の英雄、チャウ・エンライと同じなので、息子をエンライと名付けた。ぼくは彼が成長して自分の姓を選ぶさい、ぼくのはうのアイダを選んだら、アイダ・エンライじゃ恰好がつくまいと思ったけれど、アサコは息子がチャウを選ぶと確信しているらしかった。

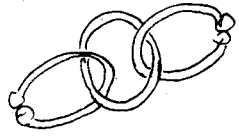
どっちにしたところで、現代ではそもそも姓にさしたる意味もないし、父の姓でも母の姓でもたいした違いはないんだから、ぼくもかんとんに賛成したのである。

アサコは産後二週間で退院して来、さらに一週間静養して、経済企画局へ出勤した。母子の入院中、ぼくは病院へ通って、育児の初歩的技術の講習を受け、入浴のさせ方、きがえのさせ方、おむつのとりかえ方などを習得した。

はじめての経験だから、ぐにやぐにやるエンライを、最初は風呂へ入れるどころか、抱くのさえおぼつかなく美術品の掃除以上に気をつかっていたが、ぼくも男だ！このくらいの困難に負けてはならんががんばった。

さいわいぼくは手先が器用であり、職業柄さらにそれに磨きがかかっていたから、一





しよに講習を受けた連中の中では、男女を通じてもっとも上達が早かったようだ。われわれ講習仲間の男女比は、男三、女一くらいであった。

そのことが、隣にいた男との話題にのぼったことがある。

「どうでしょう、この男の多いこと！」と、彼は言った。

「育児に関しては、男の方が能力が高いんじゃないかと思えますね。第一、女は力がよいし、決断力において、少々男より鈍いというか、ノロいと思えますよ。講師のいうとおり、育児には敏速な判断が必要です。赤ん坊の異常は、見つけたらすぐ適切な処置をしなければ、危険がありますからね」

「そういうこともあるでしょうね」と、ぼくは同意を表した。兩人とも、少々誇らしく感じていたのだった。

さて、アサコの出勤がはじまると、三時間おきの授乳の問題がおこった。育児局は完全な母乳主義で、乳の足りない母のためには、ミルク・マザーの会を組織しており、入院中はアサコもこの人たちの世話になった。健康、正常な母親でも産後すぐには、十分乳が出ないものだから、そのため腹を空かして泣く赤ん坊に、ミ

ルク・マザーが授乳に来てくれるのである。皆育児休暇中の母親であった。

こういうことを入院中吹き込まれたものだから、アサコは母乳育児を信念とし、経済企画局で仕事をしながら、三時間おきの授乳をしように企てた。

ところが企画局には育児室というものがないのである。たいていの機関には育児室があつて、育児休暇をとらない母親は、そこに赤ん坊をおいて授乳する。企画局にこれがないのは、職員が赤ん坊をあまり生まないためである。数年前に出産したものがあつたということだが、この人は育児局の勧告を無視して人工栄養を用いてしまったそうた。頭脳労働は女性の適性分野であるから、ご多分に洩れず企画局の職員も女が多いのに、出産が少いのは暇がないのであろう。工場やサービス業に働く女性と違って、仕事の準備としての読書や、「根まわし」のための交際などが労働時間以外に持ち出されるので、どうしても朝から晩まで、仕事のことで頭がぱいになりやすいのだ。

育児室設置の問題で、アサコは上司と激論を交わした。上司は深い考えもなしに、人工栄養でいいじゃないかと口をすべらしたのだから、アサコから母乳栄養についての講義を、一時間ぐらいごってり聞かされ、しまいに母親には母乳で子を育てる権利があるとか、もしエンライが健康を害したら、企画局にも責任があるなど、

とおどかさされ、権利や責任に弱いのは公務機関員のつねで、とうとう育児室設置に賛成させられてしまった。さアそれからしばらくが使い走りになって、上部機関に書類を届けたり、必要な備品を買うのに立ち会ったりして、とにかく彼女の休暇切れと同時に育児室は設置された。

それは大きいオフィスの一面をしきった小部屋で、オフィスのほうは印刷機の置場になっていた。人が常時事務をとってるところでないから、赤ん坊も遠慮なく泣けるというわけだ。

そこへぼくはエンライを抱いて毎朝アサコと一しょに出勤し、三時間おきにアサコを呼び出して授乳をさせるという段取りである。

アサコは仕事に熱中して授乳時間を忘れる傾向があつた。そこでいつもぼくが彼女のデスクへ直通の電話をかけ、

「さっきから泣いてるぞ」「もう腹減ってるようだぞ」とか注意しなければならなかった。一度なぞは彼女がどこへ行ったのかわからなくなって、エンライは泣き叫ぶ、仕方なく局内放送のロジックで、「チャウ・アサコさん、チャウ・アサコさん、エンライちゃんの授乳のお時間です。育児室へ至急どうぞ！」と呼び立ててもらう始末であった。

そのとき彼女は、政府関係の一人と、応接室で言い合いをしており、放送を聞いてもくるところでなかった。やっと一時間もして現われたが、「マアうるさく泣くじゃないの、ごはんの



一回や二回、がまんしたらどうなのサ」などと乳の痛みも感じないらしくぶんぶんする。

育児担当のぼくとしては、こういう彼女の態度には抗議する義務があった。われわれはしばしば言い争った。しかしなんといつても、欲しいと思って生んだ子だから、仕事のことを頭から離れれば、アサコもエンライがかわいくてしょうがないのであった。

育児室では、エンライが眠っている間、ぼくは何もすることがない。大学時代の専攻は政治史なので、そのほうの書物を何冊も持ち込み、いささか勉強をし直したり、それに飽きるとぼくのホビイの一つである、日本刺しゅうをしてみたりした。木枠に張ったアサコの絹の肩掛けに、蘭と菊の模様を繊細にぬい取り終ったころ、エンライの離乳期がきて、ようやく育児室とおさらばすることができた。

エンライは生後五カ月めに入り、順調に発育していた。気候も初夏でさわやかであった。

彼は少しの離乳食と、一カップのミルクを飲んだ。離乳食はびん詰めを買ってくる。ミルク

も調乳、消毒済みのを売っているので、ぼくは

それらを一回一時間以上もかかって、あやしあやし食べさせるのが仕事だった。おむつは清掃局洗たく課が集め

にきて、洗ってくれる。家の掃除は清掃局のぼくの仲間がきて、週三回、すっかり磨いていってくれる。こんなわけで、ぼくは暇がたっぷりあったから、エンライをかわいがる楽しみに浸りきることができたのだった。

どんなにわれわれ父子は、仲よくふざけ合ったことだろう！

今思えば涙のたねであるあの楽しさを、ぼくは死ぬまで忘れないであろう！

もちろんトラブルもないではなかった。また育児室通いのころ、エンライは突如出ペソになってわれわれを驚倒させた。原因は結局不明であったが、彼が大声で泣きすぎるためらしいといわれた。それがなかなかおならないので、アサコはついに中国の親類にまで問い合わせの電話をかけ、その結果一本のヘソ脱腸帯が送られてきた。これは中国では広く使われているというので、まさに革命的效果があり、一週間で出ペソはなおってしまったのだった。

それから、離乳期に入ると彼は夜泣きをはじめたので、ぼくは育児局指導課とロジックで相談しながら、夜間に入浴をさせてみたり、昼間眠らせないように遊んでやったりして、努力した。アサコの勤務に障るので、これは緊急の問題であった。

このようにぼくが、エンライの夜泣きと苦悶しつつも、そのかわいらしさを存分に楽しみつづけたとき……

彼が訪問してきたのであった。

彼、ダテ・ゴロゾウはぼくの大学時代のゼミの仲間で、卒業後さらにアメリカの大学へ行って学位をとり、そのまま研究生生活に入った。

近來なにか男権回復運動みたいなものに血道をあけているらしく、その組織のパンフレットなそを、何回か送りつけてよこしたことがあった。そのダテが、ふいにわが家を訪ねてきたのである。ときは朝で、アサコはとうに出勤、ぼくは昨夜の夜泣きにねむい目をこすりながら、エンライのおむつをかえているところだった。

「ヤア……ダテ、いつ帰った？」

「おふくろが死んでね」

彼は晴れやかな顔で帰朝の理由を告げた。

「それは、それは。お若くて亡くなったんだね」

「イヤ、若くなんかない。八十過ぎてたよ」

「君のお母さんが？」

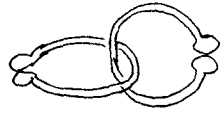
「ぼくは彼女の五番目の結婚の、最後の子どもでね。ホルモンを打ちづめに打って、五十九でぼくを生んだのさ」

感謝すべき女性だと思った。

強きものよ、汝の名は女である。

われわれはさっそくコーヒートを淹れたり、テーブルに菓子等を並べたりして、一別以来のつむる話にふけた。

一段落したところでエンライが腹を空かせて泣き出す、ぼくがあやししながらミルクのおやつ



を与えていると、ダテはニヤニヤしてからかった。

「天使ルシフェルは墮落したんだ。地獄へおちて、悪魔になったんだ。」

今や男は墮落した。家庭へ墮落して、何になったのかね？ 犬になったのかね、ブタになったのかね？

「そうだったもんでもないさ」

ぼくはすばらしい実感からして、とてもこの状態が地獄とは思えないので、

「君は何か、『男よ家を捨てよ』とかいうパンフを出してたけど、家を捨ててそれじゃ男はどこに住むんだい？」

君みたいに妻も子もなけりゃ、そりゃア「家」へ帰ったっておもしろくもなかるうけど、この楽しみはぼくは捨てるところじゃないね」

彼は答えた。

「女とは、結婚せずにつき合うのが一ばんだよ。いったい、現代において結婚に何の意味がある？ 男も女も、社会的にも性的にも、まったく自由な時代なのに」

「自由の中で、ただ一人を選ぶというのが愛情だよ」

ダテはしばらく黙っていた。口もとには不気味で皮肉な笑いがあった。

「それは君の子かね？」

はたして男が、子どもをみずからの子どもである、確定できた時代があったであろうか？ 女性解放以前には、不平等な婚姻制度と、社会的差別によって、男は妻を独占した。独占している以上妻の生んだ子は彼の子であると信じた信ずるものは幸いであるが、妻が裏切ろうと思えば、彼は永遠に裏切られなければならないかった。わが日本の誇る、世界最古の長篇小説「源氏物語」は、古代の帝王の血統すら、妃の姦通によって乱されおわるというテーマを扱っている。

どっちにしたって男に分ることじゃないのである。

現代の性の自由の中で、愛情によって一夫一婦を選択するのは、差別によって妻を縛りつけるより、はるかに安全ではないであろうか。

百パーセントの安全とは、けっして男が手にすることのできないものである。

ぼくはざっとこんな主張をのべて、ダテと一時間ばかり議論をした。正論だから、ダテはいふかき気味で、最後にこう毒吐いたものだ。

「お前の言っとることは連邦政府の宣伝どおりだよ。ここ三十年来、政府閣僚の七、八〇パーセントはつねに女なんだぞ。お前なんか、女に操られているんだ」

その日から、ぼくの心の中に、アサコの愛情に対するある疑惑が、きざきざなかつたといったらうそになる。

それはさして強いものでも、はっきりしたものでもなかったが、ぼくがダテ・ゴロゾウとの議論をアサコにかくして、話さなかつた程度のものであったのだ。

あの恐ろしい事件、ぼくが生涯をあやまるに至った事件の発端は、このダテの訪問であつたので、数日後のこと、ぼくが庭仕事をし終り、さてエンライが泣かないが、まだ眠っているのかしらんと、ミルクの用意に家へ入ってみたら、泣かぬこそ道理、ベッドは空っぽであつた！

エンライはまだ歩きはしない。それなのにぼくはあわを食って、家中を、家具の下まで探しまわつた。

それから半狂乱で外へとび出した。エンライは歩いていなくなつたのじゃない、誰かが連れ出したのだという確信がかつと頭ののぼり、とにかくそいつを探そうとしたのであるが、初夏のあおあおとした広い道路には、三々五々、散歩などしている老人の姿や、時速二十キロの電気自動車がゆっくりと走っていく、のどかな風景があるばかりだつた。

半時間も右往左往したあけく、ぼくは家へかけもどつた。そしてアサコに電話をかけた。口

ジックでは表情を読まれるおそれがある。

「アサコ? 今、エンライをつれてアサクサ・公園へ来てるんだ。君は今日帰るの早い?」
「アラ、あいにくちよとおそくなりそうなんだけど……」

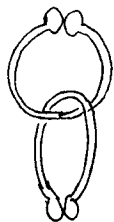
「そう、それじゃ解放ガ丘のおばさんとこへエンライを見せに行つて、夕めしでもごちそうになって来ようかな」

「いいわね。でもエンライに悪いもの食べさせないでよ。夜はまだ風が冷たいから、よく着せてやってね」

ああ、仕事本位の彼女でさえ、こんなによく気が付くのに、育児担当のぼくたるや、目の前で何者かに愛児を奪い去られてしまったのだ! エンライをこの腕に抱かすに、なんの面目あつてふたたび彼女の前に出られようか。

とにかく今晚、九時か十時までの時は稼いだ。アサコがおそくなるといったときは、たいていそのくらいの帰宅になるのだから。

警察に届けようという考えも、浮ばないではなかったが、ぼくの不面目感はそれに抵抗した。



こんな不始末はひとに、ことにアサコに知られたくなかったのである。

電話を切って、とりあえず何かから手をつけるか、考えをまとめようとしたが、ひどくど

うきがして、気分が悪いこと倒れんばかりだった。

何杯か水を飲み、やっと思いついたのは、電話やロジックにレコーダーをつけておくことで、脅迫があった場合には手がかりが得られる。

遠い昔の資本主義時代には、営利誘拐ということがあったそうだが、現代よくあるのは復しゅう、嫉妬のための誘拐である。その時ばかりはてっきりこれだと思ひ、つまりアサコに情人があつて、そいつがエンライを自分の子だと思つたか、あるいはぼくを嫉妬して彼女の夫の地位から追つぱらおうと考へたかして、仕出かしたことではないかと想像した。それでいてアサコに少しも悪意を抱かなかつたのは、ぼくの愛情が深かつたからか、それとも底ぬけのお人好しだつたからだろうか。

レコーダーをつけ終つたときだった。

ブザーが鳴つて、ロジックがついた。ハッと見ると画面にまきれもなくエンライが笑つてゐる。

「エンライ!」

「さわぐな」

ロジックから男の声がきこえた。写っているのはエンライばかりだ。声はいう、

「アイダ・ケンジ君、君の息子さんをお返しするから、すぐ玄関を出て、道路へ下りなさい」

映像が消えると、ぼくは前後の境界もなく、

おもてへ飛び出した。そこに数人の男……若いのも中年のもいた……が待ちかまえていて、ぼくをとつ捕まえ、荷物運搬用の大型自動車に押し入れたものである。

荷物を積む箱の中に入ったわけで、窓がないからまっ暗だ。

男達の一人が小さなライトを持ていて、それでぼくを照らした。他の連中はぼくの前後左右をとり囲み、皆で空箱に腰かけていたのだが、やはり時速二十キロの車で、どのくらい走つただろう。たいした距離ではなかった。

ロジックの予告どおり、ぼくはそこでエンライを返してもらうことができたのであるが、その代償として、彼らの秘密組織に加わることを強要されたのである。彼らにいわれたことは、ほんとうにぼくの血を凍らせた。

「君は警察に届け出なくてよかった。われわれは届け出られることを予想していたので、当初の目的はこの子どもを血祭りにあげ、君のような女の手先に警告を発するにあつたのだ。しかし君が届け出なかつたので、計画は変更された。どうしてかつて? われわれは同志を必要としており、君はこの子の安全のためなら、確実に秘密を守るだろうと見られたのだよ」

(次号完結)



お・い・や・ふ・り

ハガキにエンピツ。そ
れだけで書けるコーナ
ーです。何でもどうぞ。

先日「わいふ」をいただきました。

家事についての意見が沢山だされていました。がどの方の意見もそれなりに素晴らしいと、率直に思いました。

仕事が第一義なるべく手を抜きたい人、家事が楽しくてならない人、どなたも時を大切に使用っていらっしゃり御立派に思えました。

私自身は前者の部類に属したいと願っている人間ですが、プロの主婦に徹している人（子どもを三〜四人以上も育てあげ料理も衣類も何でも自分でやってのける人）を羨ましい、とも思ひ

ます。

つけものもお菓子も手作り、子どもや夫婦の服もミシンで……そして読書もやり、名曲をきき、社会運動もして……なんて、とってもステキだなあ、と思うんですが、いけませんかしら。

私なんか家庭科の時間、先生からにげまわっていた劣等生でしたから、プロの主婦には脱帽したいのです。

でも家事より仕事よりペンを持ちたり、読んだり、話し合ったり、そういうことの方が好きですから、家事以外の仕事の方を第一義にした人間です。

母が好きだった本が私までとりこにしてしまい本屋に行くとき恋人に会う前の如く胸の高なりを感じてしまいます。あの気持は絶対に恋人に對するものです。

そんなに本が好きならそれに一日中付き合っていられる仕事につきたい、と思うのですが、教育をやった私に教育外の仕事につくことに犯罪者の如くなるのはどうしたらよいでしょう。教育には強い関心があるし、教師はスバラシイ職業だと思うのですが正直云って本当のつき合のいのある仕事の方が好きだなあと思うのです。なかなか自分に忠実になれなくて、堅物の自分

がいやになることもたびたび。

さて「わいふ」に対して称賛の言葉がなければいりますが（その称賛も当を得ていると思われませんが）これは少人数の誰でもが載せてもらえる雑誌であること、しかも編集人が素人である、ということが親近感を増している大きな原因のような気がします。

これが大きな新聞の「何々会」の如くなったらどうなるであろうかと、少し心配いたします。

神戸市 小原 昌子

結婚四年目、三人の子ども（二才男、一才女、五ヶ月女）がおります。一四一号では、今大いに関心のあるしつけについて、興味深く読ませていただきました。

理想像としてまだはっきり固まっていらないのですが、基本的には「子は親の言うとおりににはならないが、するとおりになる」と思い、育児と共に育自に励んでいる私にとって、「わいふ」は大変、参考になります。

京都府 足達 啓子

「わいふ」誌十七日到着。装丁からしてなかなかりっぱで感心しました。同人誌などやっていると言費のことなど思うようにいかない事が多いので購読者がどれ位いるかわかりませんが、それにしても大変なことと思います。

さて内容について、職業を持つ一個人であり、かつ一家をあずかる主婦であるという婦人の、婦人であるがためのハンディの克服という点が最も大きなポイントであるという認識がまず明確に読みとれるのですが、それが各家庭内部における、つまり夫婦間の問題として、まず解決が目ざされていることに一面の正当性を認め、同時に社会に対する姿勢の欠落に一面の物足りなさを感じざるを得ませんでした。

現実には、現状では確かに夫が妻の人格と能力を認め、その發揮のために可能な限りの努力をするというのでなければ、あるいはそれでやっと妻が職業なり何なりに情熱をむけるのであってみれば、そこから始めるのが妥当でありましょうし、各家庭において妻の地位があがれば社会全体にも、それなりの影響を及ぼすでしょう。

しかし、それはあくまで「それなり」に留まると思うのです。男社会がその中に弱者の踏み台をかかえている限り、常にだれかが何かが、無理を、犠牲を強いられずにはすまないのですから。

ともあれ、取りつきやすさを考慮するならば、

やはり編集者の態度は正しいでありましょう。望むらくは、その広く力強い裾野が山頂を押しあげる作用をすると共に、頂点が更に深く高く問題提起をし、解決への姿勢を取りつつつけられんことを。

藤沢市 木村 澄子

「わいふ」号を重ねる毎に充実して立派になってゆくようで、おめでとうございます。

私も一度御活躍の御様子拝見させていただいたり、慰勞に伺いたいなあとと思う事があります。ただ何と申しますか、私の物の考え方が皆さまには非常に古風で保守的と批難されそうな傾向のようで結婚して関白亭主に飼育され(?)てますますこうじ、私としてはこの雑誌の主旨に同調しかねる面も時ときあるので首をひねっています。の。といって、私の家庭が前時代的主人の前で物も云えぬという雰囲気や不平等、不自由というわけではありません。「何時迄も新鮮で若々しいカップルに見える」とまでお世辞をいって下さる第三者もいるほど、結婚二十年の幸福な家庭です。

いはりんば亭主といっても、女とか妻の人格を全く無視している夫というよりはむしろ、女、子どもをいたわり、大切にし男は助け導くものという観念で家族を自分の分身として責任をもっていてくれる夫、大事な事は必ず相談して妻

の意見もきいてくれる、月給袋もオーブンにわたしてくれる夫、しかしながら知恵も力もたぐましいので、ついそれに頼り切っているというダメ・ワイフの私が、主人を大切にする余りに外でも内でも(特に家庭内では)主人第一にして、イバリンボに仕立て上げたのかもしれないので文句の云えた義理ではありません。

そんなわけで、親より図体の大きい息子たちも含む三人の子どもたちは皆父親を愛し尊敬し、母親をいたわり且甘える、そして皆が云いたい事をかしましく云い張りながら家の舵取りは父親が船長という我が家を御想像ください。

大きい倅は「お父さんを先頭に立てて矢面に立たせ、自分は従順に後からついてゆく顔をしているお母さんの方が知能犯です」いではないか」と申します。

このような家族関係や妻としての私の立場に至極満足(すべてというわけではありませんが、大体のところ)している私はウーマン・リブの戦いを遠いものと感じますし、又、今時そんなにしいたげられた妻の座にいる女性はいくつうな気がします。男女間でなくとも、人間すべてが平等という事は不可能で、それぞれの能力や考え、生き方も異なりますから、それぞれの長所を生かし助け合い支え合う方が、片ひじはって争いながら生きるよりも合理的で平和ではないでしょうか。(後略)

杉並区 中年わいふS・I

先日「わいふ」誌を送っていたきありがとうございました。

主婦一人ひとりが家の中でモソモソ考えていたことを口に出してみたり、文章にしたりして皆で考え合うチャンスができたことを心より喜んでおります。

とにかく、どんな環境にいてもやっている人はやっているし、やらない人はやらない、そんな気がしています。そのやらない人たちがやっている人の足をひっぱることが多いような、つまり自己擁護、自己正当化というか、自己弁護というか、自分にきびしさを求めない人というか、そういう人たちと行動している人たちとどこで通じていたらよいのか、私は桐生に住んでいて仲間のいない寂しさを感じています。

(中略) 今まで私は保母の資格と育児の経験を生かして、出産の時の留守番とか、赤ちゃんのお風呂入れとかそんな仕事をしてみたいと思いつながら主人の面子を考え出来ないで今日まで来ました。

労力銀行という仕事も始めたく思いながらもまだまだ認識不足というか、水くさい関係にとられる近所づきあいの中では、なかなか割切ってクールに助け合うという行動までいきません。私自身周囲の人を説得する人徳となし、ただの主婦のことなど誰も耳をかそうとしません。私自身、とにかく一人でも行動し娘にだけでも気持ちを伝えてゆきたい。今はただそれだけです。

一人ひとりが心が貧しいというか、金のある者が全てを動かしている。そして、それを平気で認めている、私たちの住んでいる町です。

何をやってでも絶望に近いところで、牛の歩みでも、とにかく私は、私の正しいと思う方向に向って、他人が何といっても自信をもって進む心構えはできました。

桐生市 小林 やすえ

初めてお便り致します。

さっそくながら毎日新聞に「わいふ」のことが出ておりましたので、出来ましたら会員に、と思ってお便りする次第です。

結婚してまだ十カ月。主人の両親と共に暮す二十二才の主婦です。まだまだ自分のことを主婦というのがなんとなくイヤで（おかしいですね）結婚前の自分の生活をもちこみ、友達にも変わらなないと云われます。ですからいろいろとトラブルもありますが、そうあわてて一般的な主婦の型(?)に自分をおしこめることもないと思ひ、私らしい、私ならではの家庭生活を営みたいと思っています。

「わいふ」のスタッフの方がたは皆戦前派とか。会員の方の多くもそうでしょう。そこへのこのこと戦争を知らない子ども達が現われるのは、なんとなく気がひけるのですが、でも時代はとうとうそこまで来たのだと思います。

そして新米主婦の私たちは、戦前派の主婦の方達に習うところが大きいのだと思います。

そして逆に、今までの主婦生活がパターン化してしまっただけのお母さん達には、私達戦後の主婦達を知って、年齢層のギャップをうめ、頭を柔軟にし、これから結婚する娘達の良きアドバイザーになってほしいと思います。

いきなり初めてのお手紙になまいきな事を書いてしまいました、お許しください。

横浜 市 藤井 裕子

一四一号で、嫁本しう子さんが「……今女に欠けている経済的自立を得ること、今男に欠けている生活面での自立が達成される時、男女ともに「人間らしく」自由に生きうる扉が開かれる時だと私は思うのである」と書いている。

確かにその通りだと私も思う。けれども、小さな子どもを持つ主婦が、経済的に自立するために、職場を探す時、どれほどの職場が、門を開いてくれるだろうか。パートとか、アルバイトなどではなく、きちんと働きたいと思っている主婦のために、きちんとした仕事を与えてくれる職場があるだろうか。

埼玉 県 高橋 裕見子

おねがい

「ウーマン・リブ」について、みなさんはどんなイメージをお持ちでしょうか。

リブという中ピ連を思い起こすかた、アメリカのリブ運動を考えるかた、とイメージもさまざまでしょうし、ご意見も千差万別だと思います。

143号特集「ウーマン・リブ」で、主婦であるわたしたちのなまの声を集めてみよう、ということになりました。

ウーマン・リブについてのあなたの印象を、ハガキで寄せ下さい。自分の生活とは関係ないから、興味が無い、とおっしゃるかたもそのお声をお寄せいただきたいのです。締切りは十月十五日です。

X X X

今後当分の間、テーマ原稿の募集はいたしません、各号の特集テーマについて、これこそ書きたい！とお思いの方は、持ちこみ原稿として遠慮なく投稿をお寄せ下さいませ。長さ自由です。

ティーチ・インのおしらせ

第一回ティーチ・インを次の通り開催いたします。

ティーマ 「主婦は職業か」

助言者 武田京子さん（評論家）

とき 十月二十九日一時～五時
ところ 東京都教育会館

地下鉄東西線神楽坂駅下車徒歩一分（赤城神社出口）

これまで誌上に出たみなさまのお声を出発点として討論をすすめていきたいと思ひます。

ぜひご参加をどうぞ！

X X

144号の特集テーマは「なぜ結婚するの」にきまりました。

日本人の結婚率は欧米に比べるとおとろくほど高いのですが、私たちはなぜこれほど結婚に惹かれるのでしょうか。原因を探っていくという面白いものが出てきそうです。

X X

「わいふ合評会」を隔月に一度、今度は、十一月はじめに持ちたいと思ひます。ご出席希望のかたは十月二十日までにご連絡下さい。

編集後記

▼「日本のおばあさん」の企画にとりくむうち、自分たちがこの問題に對してどれほど無知で、浅はかな先入観しか持っていなかったかを思い知らされる。

▼その底には、日本社会に特有の、事大主義、弱者無視の伝統が巣くっている。ヒューマニズムの伝統のないこの国を、本当に住みよい国にするためには、まず私たち自身の現実を知ることから始めなければならぬだろう。

▼誌上討論の場として、「わいふ・ティーチン」を新設。論争のもり上りを期待している。

▼八月末、毎日新聞の「グループ紹介」にわいふが取りあげられて以来、百人に近いかたから、反響があった。フレッシュな若い方からの投稿もあいつぎ、編集部を喜ばせている。

▼ものを書く人が一番ほけない、というデータに、編集部大喜び。それにしても最近もの忘れがひどい、とこぼす人が一人ならず。花の四十年代というのに（？）夏の疲れの出る季節、皆さまお元気で。（T）

〈わいふ〉 142号 1976年9月25日発行 定価 300円・年間予約 1500円・送料 720円

発行所・わいふ編集部 〒162 東京都新宿区加賀町2-3 田中喜美子方・TEL 260-5500・269-2388

編集 荒木弘子・田中喜美子・林 慶子・宮城道子・和田好子

印刷所・東京都新宿区岩戸町10 チトセ印刷 ★振替注文は東京5-110430 わいふ編集部へ



定価 300円